

# 崎門学報

第十一号

平成 30 年 1 月 31 日

崎門学研究会



## 目次

- 一面 保建大記を読む
- 六面 崎門列伝の伝原察南
- 八面 山本七平と崎門
- 十一面 強齋先生大学講義
- 十七面 時論・売国経済論

## 『保建大記』を読む

### 折本龍則

#### 栗山潜鋒と『保建大記』

『保建大記』は、栗山潜鋒の著書です。栗山潜鋒は、名を愿、字を伯立、通称を源介（すなわ、あざな）といい、潜鋒はその号です。寛文十一年（二六七一年）、山城国淀（現在の京都市伏見区淀町）の生れです。はじめ長澤成信といいましたが、後に改めました。潜鋒の父は長澤良節といい、儒者として淀の城主石川憲之に仕えておりましたが、貞享元年（一六八四年）、潜鋒十四歳の時、京都に遊学して、桑名松雲に師事しました。潜鋒が松雲に師事した経緯については、潜鋒の外曾孫にあたる小宮山楓軒によると、潜鋒の父良節が鶴飼鍊斎と親しく、鍊斎は松雲と同じく山崎闇齋の門下であつたことから、鍊斎の紹介によつてその子潜鋒を松雲に従学せしめたということです。松雲の下で潜鋒は神儒兼学の素養を得ました（松雲は闇齋の終焉まで侍した数少ない門人の一人であつて、『艮背語録』に見える「霊社從学ノ人」には「神儒」とあり、彼が儒学とともに神道をも授けられてゐることは、潜

鋒を考える上に大いに留意せねばならない。」

近藤啓吾先生『続々紹字文稿』所収「三種の神器論の展開」。

当時京都には、後西天皇の第八皇子、八條宮尚仁親王がまし、御幼少から英邁で御父天皇は親王を「皇子中の英物」とし給いました。親王は五歳の時八條宮の後嗣となり、潜鋒が上京した貞享元年、十四歳の時に親王の宣下を受け給ひ、深く学を好んで広く才を求められました。そこで上述した鶴飼鍊斎は親王に潜鋒を推薦し、親王の御学友として近侍せしめると共に、潜鋒の師である松雲や、同じく闇齋門下の浅井琳菴も親王の顧問に預かりました。これは、潜鋒の俊才もさることながら、鍊斎が以前から水戸光圀の命で宮家に出入りしていたことと（光圀は、家臣の鍊斎を通じて宮家御所蔵の『西宮記』『野房記』等の借覧をお願いし、宮家に親王の学問に必要な書籍を清書して献上したり、折々の産物を贈つて秘かにその大成を祈るなど、親しい交流があつた）、親王が寛文十一年の生まれで潜鋒と年齢を同じくしていたこと、さらには親王の御叔父君である霊元天皇が垂加神道に深く帰依し給ひ、将来を期待された親王に闇齋の学問を御推奨されたこと等が考えられ

ます。かくして、若き親王の下には、崎門正統の人士が集ひ、親王の御徳涵養に勉めたのでありますが、その庶幾する所は朝権恢復に他ならず、『保建大記』もまた同様の目的の下に、元禄元年（一六八八年）、十八歳の時に潜鋒が親王に献上した書であります。

こうして崎門学によつて御徳を涵養され、前途を嘱望された尚仁親王でありましたが、潜鋒が『保建大記』を献上した翌年の元禄二年、俄に薨じ給いました。御年僅か十九の若さでした。悲歎に暮れた潜鋒は浪人となつて京都柳馬場に隠遁し、『尚仁親王行状』を記すなどし、その生活は困窮を極めました。安如として学問を続けたといひます。彼が姓を栗山と改め、号を潜鋒と称したのはその頃のこととされます。その後、潜鋒は元禄六年（二六九三年）、二十六歳の時に、またしても鶴飼鍊斎の推薦によつて水戸光圀に仕え、『大日本史』編纂の史局である彰考館に入りました。上述したように、鍊斎は潜鋒を最初桑名松雲に従学せしめ、次に尚仁親王に近侍せしめ、そして水戸光圀に禄仕せしめたのでした。光圀もまた潜鋒の学識を認めて深く重用し、元禄十年（一六九七年）、潜鋒は若年二十七歳にして彰考館の総裁に就任しました。やがて元禄十三年（一七〇〇年）に光圀が薨去すると、潜鋒は光圀の葬儀を分掌して義公という諡の決定に関与し、また翌年、光圀の後嗣綱條が光圀の正伝である『義公行実』の編集を命じた際、実際に原稿を書いたのは潜鋒と

されます。かくして潜鋒の余生は、『大日本史』の編纂と水戸学の発展に捧げられましたが、後に病を得て宝永三年（一七〇六年）四月七日、三十六歳の若さで長逝し、江戸駒込の龍光寺に葬られました。



駒込龍光寺にある潜鋒の墓（中央、右は鶴飼鍊斎、左は三宅観瀾の墓）

潜鋒の死後から十年を経た正徳六年（享保元年、一七一七年）、『保建大記』は京都の柳枝軒茨城多左衛門より刊行され、さらに享保五年（一七二〇年）には崎門派の谷秦山による同書の講義録である『保建大記打聞』が版行され広く流布することになりました。秦山以外でも、この『保建大記』は崎門派の中で『靖献遺言』に並ぶ書として重視され、若林強齋は同書について「天晴ノ書ナリ。文章ト云イ、議論ト云イ、アレホド老成ナル書無レ之」（『雑話統録』）と述べ、また「近年『保建大記』コレアリ。『正統記』以来ノ書ニテ、極メテ心アル珍重ナル編集ナリ。」（『神道夜

話」と述べています。さらに宝暦事件の中心人物である竹内式部も門下に『保建大記』を講じ、明和事件の首魁、山縣大弐が捕縛された際、部屋には槍一本の他に、『左伝』と『保建大記』があるのみであったと云います。また水戸藩内部に於いても、『大記』は、藤田幽谷や会澤正志斎に深甚な影響を与えました。潜鋒が水戸学に与えた影響については後述します。



『保建大記打聞』

『保建大記』の特徴  
ところで、『保建大記』は、元の名を『保平正録』といました。しかるにこの書名に含まれる「反正」が天皇の諡であることから、『保平綱史』と改められ、その後、潜鋒が彰考館での先輩同僚との議論を経る中で、

大幅な改訂を加えたのが、現在の『保建大記』とされます。書名の「保平」とは、いうまでもなく保元・平治のことであり、「綱史」とはその間の大綱という意味です。それが『保建大記』と改められたのは、本書が大体保元から建久に至る三十八年の間において、朝廷が衰微し武家に政権が移る次第の大略を記したのだからです。大体といったのは、厳密には本書の記述が保元元年の前年である久寿二年から始まっているからです。この久寿二年は後白河天皇が践祚遊ばされた年であり、本書の記述は建久三年、天皇の崩御を以て終わります。その内容は、潜鋒による厳格な史的考証と、簡潔な筆致に基づきつつも、単なる表面的事実の記述に止まらず、朝威失墜の道徳的原因の解明に主眼が置かれております。またその上で、潜鋒は、当時における武家の台頭が、朝廷内における道徳的弛緩、なかんずく後白河天皇の失徳に多く起因することとを重く見ております。上述した様に『保建大記』の記述が、後白河天皇の践祚から崩御までの歴史を記しているのはそのためです。

平泉澄先生は、潜鋒の『保建大記』と北畠親房公の『神皇正統記』に多くの類似点があるとし、その第一に、『正統記』が、賊軍重囲のなか、皇國中興を期して、若き日の後村上天皇に捧げられたのと同様に、『大記』もまた、朝権恢復を庶幾し、幼少なる尚仁親王に献上された書であること、第二に、両者とも簡潔の筆致を以て書かれていること、第三に、両者が共に、天皇を中心として歴史を記述していること、そして第四に、歴史の根本に道徳を仰ぎ見、国家の治乱興亡を、道徳の汚隆によって説明している点を挙げておられます（『保建大記』と『神皇正統記』 杉崎仁編注『保建大記打聞編注』所収）。そしてこの第三と第四の結合が、「帝徳を最も重大視し奉り、世の治乱興廢のかゝる所、実にここに存すると為すに至っている」のであり、「是に於いてか此の両書にはしばしば不諱不諛の直言が出て来、それ故に之を非難し排斥する人さへ存する位である。然しながらかくの如き直言不諱の態度は、第一には事実を直視して真相を把握しようとする学者の良心から出た事である上に、第二には諷諫をたてまつって帝徳を輔翼し奉らうとする忠誠の至情より発する所である事を知らなければならぬ。」と述べておられます。このように、『保建大記』は、あくまで潜鋒の朝政復古を庶幾する衷情に発し、親王の啓沃輔導のために書かれたお諫めの書であり、一般向けに書かれたものではありません。したがってその直言不諱の内容を以て不敬とする批判は当たりません。

『保平綱史』から『保建大記』への改訂については、その説かんとする趣意は『保平綱史』と変わらないものの、内容的には大幅な変動が見られるといえます。その特に重要な変化としては、神器正統論の覚醒、中国論の追加、「国体」の語の採用の三点が指摘されます。なかでも、潜鋒が「宜しく、躬、三器を擁するを以て正と為すべし」とし、神器正統論を説くようになったのは、『保建大記』以降のこととされ、その直接の契機としては彰考館入館によって、神器の所在を以て南朝を正統となす光圀の思想に接したことが考えられますが、彼の神器正統論に確固たる指針を与えたのは、やはり『神皇正統記』の存在であったようです（松本丘先生『尚仁親王と栗山潜鋒』勉誠社）。もともと、そうした『正統記』からの影響も、潜鋒のそれまでにおける神道の素養がなくては不可能であり（後述）、彼は師である桑名松雲の下で神儒兼学の修養を積んだだけでなく、親王薨去の後、正親町公通を始めとする堂上の闇齋門下と交流し、垂加神道の修養に勉めていたことが判っています。松本丘先生によると、山崎闇齋の門人にして下御霊社の祠職であった出雲路信直の日記には、潜鋒と思しき人物が桑名松雲と行動を多く共にし、元禄四年（一六九一年）二月を始めとして正親町公通邸にて杜詩の講習に参じていることが見え、また同年五月の記事を発端として、松雲の甥である丹下柳軒と共に出雲路信直より『御鎮座伝記』や『倭姫命世記』など、伊勢神道の「五部書」の講義を受けていたことが知られ、さらに同年十月から翌年五月頃にかけての神代巻講釈の聴衆中にも、後に垂加神道の道統を継いだ玉木葦斎等と共に、その潜鋒と思しき人物の名が見えると述べられています。（『尚仁親王と栗山潜鋒』）



このように、潜鋒の『保建大記』の根底を貫く思想は、神儒兼学の精神であり、正しくそれは崎門学の要諦に他なりませんでした。同じく崎門派の谷秦山が同書に感銘を受けたのはその為であり、秦山はそのことを『保建大記打聞』の冒頭に於いて次の様に述べています。

師（秦山）曰、吾も人も、日本の人にて、道に志あるからは、日本の神道を主にすべし。其上に器量気根もあらば、西土の聖賢の書を読んで、羽翼にするぞならば、上もない、よき学なるべし。是（れ）舍人親王の御本意、恐ながら吾等内内の志也。然に今の神道者は、西土の書にうとくて文盲なり。儒者は人の国をひいきし、吾が国の道を異端のやうに心得てそしり、各異をたて、湊合根著（とりまとめて、しつかり根差す）せず。学風が薄く猥りにして見に足ぬぞ。吾これを憂ひ、内内同志と講習して、天下の学風の助にもなる様にしたいと思へども、山崎先生は過去り玉ひて久しく、浅見安正は晩年神道に志は出来たれども、やう／＼一兩年の内卒去めされて、うしろだてにすべし先輩なく、其外名ある学者たち、多くは斉の国、魯の国のせんさくを第一にして、吾が国に懇切なる志なく、又は神道を尊敬はせらるれども、未伝授なり。其外は詩文の浮華にめで、どれこそ取（る）に足らぬぞ。平生是をきのどくに思ひをりたに、このごろ不慮に此の書が出たぞ。是ほど珍重

なことはない。古今めずらしい書ぞ。是こそ神道を大根にして、孔孟の書を羽翼にしたと云ものぞ。さるによつて吾れ事の外信仰する。過ぎ去た人なれども、甚（だ）味方に思ふて、此の講席を開くぞ。別して本望千万ぞ。栗山氏の師授淵源はしらねども、両巻とも論に間然することはないと見へた。先賢にも愧ぬ見識、後学のよき矜式なり。日本の学者は唯この様に学問をしなすべしもので。千万祈祝の至也。（元片仮名、括弧内筆者）

この様に、秦山が『大記』を激賞したのは、それが「神道を大根にして、孔孟の書を羽翼にした」書だからであり、闇齋最晩年の弟子でありながら、その神儒兼学の精神を最も忠実に受け継いだ秦山をしてこの書に邂逅せしめたのは運命の必然とも言い得ます。

### 谷秦山小伝

谷秦山は、名を重遠、通称を丹三郎といい、秦山はその号です。寛文三年（一六六三年）三月十一日、父、重元の三男として、土佐国長岡郡豊岡、現在の高知県香美市土佐山田町に生れました。谷家の先祖は、同地の八幡宮の神職をしておりましたが、長曾我部氏に仕えて武士となり功があつたといわれ、また長曾我部氏滅亡の後には武士を捨て農業に従事したと云われます。なかでも、秦山の祖父神右衛門は、土佐藩の家老の野中兼山と親交があり、兼山が長曾我部氏の遺臣を召し出して郷土と

したのに、その武功を調べて長曾我部氏の感状がなければ許さなかつたのを、この神右衛門の一言を以てすれば文書無しで許したという程信望の厚い人物だったと云われます。それでも谷家の家産は傾く一方であり、元禄元年父重元が亡くなった際には、葬儀の費用にも事欠く有様でした。

秦山は、九歳の時に母方の祖父である島崎氏に就いて小学、四書を読み、十歳の頃には常通寺に入つて守信法印を師として法華経を読みましたが、わずか二カ月で暗誦してみせたといえます。十二歳の時に寺を辞して家に帰りました。延宝七年（一六七九年）、十七歳の時に京都に上り、浅見綱斎に謁し、さらに山崎闇齋に謁して教えを受け、翌延宝八年に帰国しました。土佐藩当局は秦山に禄を与えて登用しようとしたが、彼はこれを辞し、再び上京して闇齋に従学した後、翌天和元年（一六八一）に帰国しました。しかし、その翌天和二年に闇齋が亡くなると、この訃報に接した秦山は急遽上京して先師を祭つた後、帰国しましたが、その後も秦山が亡き師である闇齋を尊敬する念は一生変わりませんでした。翌天和三年には、学問をするには郊外で居住するにしかずとして住居を高知城下の北の秦山に移し講学に勉めました。秦山の号の由来は此処にあります。

藩への禄仕を辞したことで秦山の生活は一層の窮乏を強いられました。その窮乏ぶりは、豊岡にある先祖の墓に参るにも、自分の衣服

が破れ体を覆わず、到底外出し難いので木綿の拾一枚の借用を友人に依頼したりしています。また絶食することしばしば、友人が秦山のために雇い入れた下僕の困窮を見るに忍びず、国元に送り返す程でありました。元来彼は体が弱く、京都遊学の蔡には眼に疾病を患い「幸い盲に至らず」との診断でしたが、他にも胸の痛みや吐血に苦しんだようです。しかし、こうした貧困と病弱にも屈せず、秦山は講学と求道の道を邁進したのでした。貞享三年（一六八六年）に「炳丹録の序」を著し、翌年には土佐最西端の宿毛に幽閉されていた野中兼山の遺子、継善の下を訪れています。

上述した様に、野中兼山は土佐藩の名家老として辣腕を振るい、江戸から持ち帰った蛤を土佐湾に持いた話など、その英明さを伺わせる数々の逸話が残っておりますが、同時に彼は土佐南学の継承者として、当時同地の吸江寺にあつた山崎闇齋を還俗させて朱子学に向わせた同学先輩です。晩年老臣達の弾劾で失脚し、職を辞した年に亡くなりました。しかし藩は兼山を追罰してその遺族を僻遠の地である宿毛に幽閉し、残酷にも一族の結婚を禁じて子孫を根絶やしにしようとした。秦山が生まれたのは兼山が亡くなった年であり、秦山は兼山から少しの恩顧を受けた訳でもありませんが、兼山を深く尊敬し、兼山に旧恩のある者ですら、ことごとく時勢を恐れ当局におもねり、遺族との交流を避けていた中であつて、独り継善を訪うてその苦勞を慰

めようとしたのですが、継善の幽居は警戒が厳重で面会は叶いませんでした。しかし、この一事を以てしても秦山が、利を思わず義に勇み、正を履んで少しも恐れることがなかったことが判ります。



野中兼山

その後、元禄七年（一六九四年）、三十二歳の時には渋川春海に書を寄せて天文暦学を学びました。渋川春海は、山崎闇齋の弟子で、つとに出藍の誉れ高く、はじめ秦山は闇齋に天文暦学を問うたのですが、まもなく闇齋が亡くなったので、春海に入門しようとした。しかし藩の許可を得られなかったので書面での問答を続け、元禄十年（一六九七年）には春海から暦学の印可を受けました。

元禄十五年（一七〇二年）、四十歳の時、藩主山内豊房の命で出仕し、藩の役人等に講義してその聴衆六十人を下らなかつたと云いますが、やがて藩での仕事で学問に支障を来すことを恐れて辞職しました。宝永元年（一七〇四年）、四十二歳の時、藩から許されて東遊の旅に出た秦山は、江戸で春海と

面会し、各地の山川宿駅や寺社を遊観したときの事を記して東遊紀行二巻に著しました。その後、宝永三年（一七〇六年）、四十四歳の時、藩命で『土佐国式社考』の草案の校訂を吉田神道の卜部兼敬に依頼するため上京しています。翌、宝永四年、藩主豊房は重臣に式社の造替を命じ、秦山にこれを相談させようとしたが、直後に豊房が薨じるとその話は立ち消えになり、秦山は冤罪を着せられて藩より禁固の命を下されました。時に秦山四十五歳。この時の罪名は定かではありませんが、『秦山集』にある「谷秦山小伝」によると、「当時幕府林信篤に命じて聖廟を建て文学を興し絃歌の声所在に起る。而して儒臣学士大義名分を曲解し甚だしきは冠覆倒置の言を為して以て天朝を侮蔑するに至る。世人察せず以て当然と為す。蓋し時勢爾かるなり。先生の学、已に闇齋綱齋の上に駕し其の大義名分を説くこと糸絲紊れず。以って一国人士の心を感孚するもの有り。当路の人蓋し之を説かず。公の館を捨つる（薨去するの意か）を機とし之を排陥するなり。」（括弧内筆者）と述べ、秦山の大義名分の論を疎んでのことであつたと推測しています。しかし「小伝」は秦山の晩年ついて、「先生既に禁錮せられ毫毛も怨尤の色無し。昼は則ち書を抄し文を改め夜は則ち天象を観。星宿を認め十有二年一日の如し。享保三年六月晦以て終る。年五十六。」と記しております。秦山の墓は、香美市土佐山田町にあります。いまも受験

生など学問の成就を祈る者が秦山の遺徳を称え、墓前に日の丸の小旗を捧げる風習が残っているそうです。

特筆すべきは秦山の死後、その精神は子の垣守、その子真潮と代々受け継がれ、さらに子孫を下つて西南戦争時の熊本鎮台司令官、谷干城將軍を輩出したことです。谷干城將軍は、「君命にあらざれば苟も出処進退せず」とする崎門学の要諦を貫き、熊本鎮台を西郷軍の攻囲から守り抜いたのでした。垣守も干城も皇室を御護りするという意味であり、『谷干城遺稿』によると、谷家には「万一京都に事があると聞いたならば、如何なることがあつても直に京都に上れ、旅費が無ければ、乞食をして宜しい。乞食をして京都へ上れ、京都へ上つて、御所を護り奉れ。若し力無くして何も出来ないならば御所の壁に凭掛（よりかか）つて死ぬ。死んで、御所の堀の土となつて御所を護り奉れよ。」との家訓が残っているそうです。



谷干城將軍

## 秦山と潜鋒

これまで秦山の略歴を述べましたが、前述したように何といつても彼の思想的真価は、崎門学の要諦である神儒兼学の精神を闇齋晩年の弟子でありながら最も忠実に継承したことにあります。闇齋の弟子は六千人といわれましたが、その中でも、儒学から神道に傾倒した闇齋の心事を理解しえた弟子は稀であり、それは「崎門の三傑」と呼ばれた浅見綱齋、佐藤直方、三宅尚斎についても例外ではありませんでした。佐藤直方が、儒学を妄信するあまりに湯武放伐を容認し、師説に反したことは、先に『拘幽操』の処で述べましたが、綱齋や尚斎についても、普遍的人倫としての儒学に偏執する一方で、我が国固有の道である神道の奥義には到達しませんでした。これに対して、秦山が闇齋に入門したのは、闇齋が亡くなる前年の天和元年であり、師事した期間は一年にも満ちませんが、神儒兼学の精神を忠実に継承しえた事は、秦山が綱齋と尚斎との間で交わした複数の論争的書簡によつて証されます。そこでは、「尚斎の、もし神道を我が国の正道と主張して已まないならば、儒学は一向に之を廃すべきではないか、しかるに依然儒学をも修めるのは心得難いといふに對して、もとより神道は我が国の正道であり、別に儒学を必要としない事は、応神天皇の御代儒学渡来する以前の見事なる御治世、美しき風俗を考えれば明瞭な事であるが、

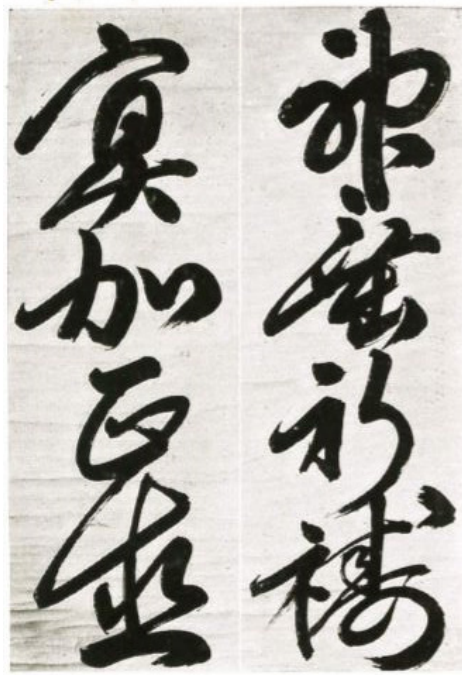


既に儒学入り来つて後、その細密なる考察になれては、簡古高潔なる神道の古伝のみにて奥妙に達する事困難なるが故に、儒学をも大切に学ぶのであつて、かくの如く神道を主にしながら、併せて儒学をも取るのは、我が国の道、真実公平正大なるを示すもの、儒学に溺れて「我が国祖宗伝授の正脈を見まい聞くまい」とする如き偏執とは違うのであると答え「たとあり、平泉澄先生は、綱齋について、

「豪邁木強、自ら真じる事最も厚く、其の師山崎先生にすら従ふ事の出来なかつた此の人物をして、晩年遂に神道に志あらしめたのは、全く秦山先生の鋭利なる抗論、之を導いたのであらう。」と述べておられます（平泉澄『万物流転』所収「險難の一路」至文堂）。元禄六年（一六九三年）、三十一歳の時に作られた秦山私塾の学則である『私講勝論』には、「この頃、二三子の称説するを観るに、其の堯舜湯武の事に於けるは、或は詳ならずと雖も、猶聞くべし、其の日本神聖祖宗の事に於けるは、ひとり伝授の次第を知らざるのみにあらず、或は名号男女の分を弁ぜざるに至る。

あゝ、人の父を知つて己の父を知らず、人の君を認めて以て己の君となす。此の莫大の罪、二三子疎学の過と雖も、抑も又近時風俗の弊、志ある者、痛く懲して猛く之を革めざるべけんや。今方に二三子と、孔朱の書に従事す、固よりまさに夙夜鑽研、日、給するに暇あらざるべし。然るに此れは是れ学者終身の事業、休憩を期すべきにあらず。而してまさに所謂

日本之学なる者は、即ち我が神聖相伝の道、君臣父子の大倫、中国夷狄の厳弁に關係す。豈第二義の看をなさんや。只よろしく神儒並び進み、博詳兼掌すべきのみ。当にまた疑難すべからざるなり。」とあり、神儒兼学に基づいて「日本之学」を確立せんとする秦山の態度がはつきりと示されています。そしてこの態度こそ、先にみた秦山による『保建大記打聞』冒頭の趣旨と完全に符合するものです。



神器正統論の根底

真蹟「神垂祈禱冥加正直」による秦山

（中島鹿吉著『南学読本』の口絵に所載）

館の史官のなかにはこの方針への異議が存し、なかでも南朝正統論に対しては、今上の天皇が北朝の血を継ぐことから反対する意見が少なからずありました。そこで潜鋒は南北正閏の判断基準を神器の存否に置き、「躬に三器を擁するを以て正と為すべし」と論じることによつて、光圀の示した方針に依拠を与え、これを史実において証明しようとしたのです。しかしこれに対しても、彰考館の同僚

であつた三宅観瀾は、皇位の正統は、神器それ自体よりもその授受の正しさによると主張し、『保建大記』の序において「神器の存否を以てして、人臣の後背を卜する者とは、議竟に合はず」と記し、先輩である安積澹泊もまた跋文において「宅君、其の精確に服して、神器の議は終に協ふ能はず」と記したのでした。神器を以て正統となすといえ、容易に想定されるのは、では神器が何者かに奪われたならばその者が天子になるのかという疑問です。例えば頼山陽は「読保建大記」と題する一文において「其の言に曰く、神璽・宝剣・内侍鏡の在る所を以て正統と為す、と。若し然らば、則ち仮に盗賊をして神璽・宝剣・内侍鏡を持たしめんか、盗賊もまた皇統と為すなり。是れ神璽・

宝剣・内侍鏡は盗賊に資して我が皇の国を奪はしむる者、何ぞ貴重するに足らんやと。之れを棄つと雖も可なり。」と述べております。この問題については、『保建大記』を読んでいた吉田松陰も言及しており、彼は『講孟荀記』の巻末に付した「読保建大記」なる一文において、潜鋒の神器論を一応は支持しつつも、「神器の在る所は必ず正統にして、正統の在る所は必ず神器あるなり」、「神器は正統の天子の禪受する所なれば、君臣上下、死を以て固守すべきこと、其の義昭々なり。」と述べ、両義的な表現に止まつています。

では、皇位の正統において三種の神器は如何なる意味を持つのでしょうか。近藤啓吾先生は、次の様に述べておられます。「思うに土地といひ家屋といひ、その所有を主張するものが複数であつて互ひに所有の権利を争ふ時には、その土地や家屋の権利書を所持してゐるものを正しい所有者と判断せざるを得ない。されば人はみな権利書を大事にして失はぬやう盗まれぬやう、だまし取られぬやう、その保管に心を用ひるのである。神器もその性格、ある意味では権利書に似てをり、皇統分立していつれが正しい天子であるか知りがたく、人々帰趨に苦しむ時は、神器を有してをられる御方を真天子としてこの御方に忠節を尽くさねばならない。いはんや神器は権利書と異なり、その由緒からいへば大神が天孫に皇位の御印として賜与せられし神宝であり、大神の神霊の宿らるところとして歴代

天皇が奉守継承して来られた宝器であり、極言すれば、天祖・神器・今上の三者は一体にして、神器を奉持せられるところ、そこに天祖がましますのである。」(近藤啓吾先生「続々山崎闇斎の研究」所収「三種神器説の展開―後継者栗山潜鋒」)つまり、神器は土地の権利証と同じで、二重譲渡における對抗要件となるものです。したがって、それはあくまで皇位の「正統」と「閥統」を弁別するために出て来る議論であって、そもそも土地の無権利者が権利証を盗んでも所有権は主張できないように、強盗が神器を略奪しても皇位を主張することなど出来ません。そして近藤先生が述べられるように、三種の神器は、単なる皇位の標章ではなく、天照大神の神霊が宿られることで、それを奉持せられる天皇は天照大神の御神徳と一体になられるのです。

先に潜鋒の神器論が、神道の修養に基づいていることを述べましたが、垂加神道に伝わる重要な秘伝の一つである「三種神器秘伝」には、次の様な大変興味深い事が書かれています。曰く、「上有<sup>レ</sup>道則三種霊徳在<sup>二</sup>玉體<sup>一</sup>、上無<sup>レ</sup>道則三種霊徳在<sup>二</sup>於神器<sup>一</sup>焉、雖<sup>レ</sup>為<sup>二</sup>無道之君<sup>一</sup>、傳<sup>二</sup>賜神器<sup>一</sup>、即是有徳君也、此神器與<sup>二</sup>玉體一合<sup>一</sup>、無<sup>二</sup>分別<sup>一</sup>故也、是は上道あれば三種神器と玉體一致也、有道の君に非といへども、此神器を備をけば、此神徳を以日本國を治め玉ふ事也、是によりて有道の君も同じことになる也、日本に女帝の多もこの故也、三種神器を備へ置けば、男女のかまひ

は無<sup>レ</sup>之、天照大神は女帝ゆへに、此例を以日本には女帝を立てること多しと云説あり、誤り也、武烈天皇は悪事の多き帝なれども、三種神器を備え置て、大伴金村其節の體を考る内に、崩御の後、大神の御子孫を尋出、越前國より繼體天皇を迎奉り、神器を授奉りて御即位をなし、四海安全となるも、皆此神器の霊徳也」。すなわち、三種の神器は天照大神の依り代として、天子に徳があれば、玉体と合致し、徳が無ければ、玉体に代わって大神の徳を現すのです。であるが故に、神器があるかぎり皇位は正統なのであり、皇統は無窮なのです。この「三種神器秘伝」は、元々垂加翁こと山崎闇斎から直門の正親町公通と出雲路信直に伝授され、さらに玉木正英(葦斎)、跡部良顕へと伝わったと、良顕自身が識語で記しています(『三種神器極秘伝』神道叢書)。

### 『保建大記』の今日的意義

さて、栗山潜鋒が著した『保建大記』は、徳川専政の当時においてのみならず、戦後七十年以上を経た平成の現在においても重要な意義を持っています。それは、徳川の時代と同様に、現在の我が国も、一天万乗の天子を擁しながら、君臣内外の名分は乱れ、朝権

は、悪臣と外夷によつて凌辱された状態が続いているからです。したがって、我々国民は、天皇の臣下として朝権恢復を庶幾するが故に、昨今における朝威失墜の原因を明弁し、歴史の中に普遍の道徳を仰ぎ見ることによつて、君徳を涵養し奉るよすがとせねばならないのであり、同一の趣旨を以て記された『保建大記』が重要な意義を持つのはその為です。特に、戦後の皇室制度による皇統問題が深刻化し、国論を二分しつつある現在において、潜鋒が『大記』で打ち出した神器論は頗る重大な示唆を与えられると思われまふ。すなわち、現在の国民に親しみがあつたことを理由として女性女系天皇を肯定する論陣に対して、皇位の正統はあくまで三種の神器にあり、天子の有徳如何は問題にあらずとして、男系論を固守する上での有力な論拠になると思われるのです。よつて、我々は單なる歴史上の興味ではなく今日の関心を以て『保建大記』を読むべきですが、同書は刊行当時において既に難解であり、谷秦山の『打聞』を以てしてようやく人口に膾炙するを得ました。しかし今日においてはその『打聞』においてすら難解でとても一般読者の用には供し得ません。そこで、筆者は以下において、秦山の『打聞』を本にしなが、『大記』の現代語訳を試みようと思います。先学への僭越非礼は承知の上ですが、朝権恢復を庶幾するの衷情に発するものと御寛恕を賜れば幸甚です。(続く)

## 崎門列伝⑩合原窓南

(顧問) 坪内隆彦

### 高山彦九郎を引き付けた久留米の氣風

かつて久留米は勤皇派にとつて特別な土地だった。そのきっかけを作ったのが、今回取り上げる合原窓南である。崎門正統派の内田周平先生は「崎門尊王論の発展」において、筑後上妻郡は合原が長く子弟を教授した土地であり、その流風余韻が残っていたと書いている。

さらに内田先生は、宝暦十二(一七六二)年の山崎闇斎先生墓所修繕を支えた寄付者として、筑後の人が十八人記録されていると指摘した上で、「維新前に於ても筑後は勤王志士の潜匿所のやうである。是れには何にか因縁があらふと思ひます」と書いている。一方、昭和維新運動に挺身した三上卓先生は、『高山彦九郎』において次のように書いている。

「窓南先生の遺業は斯の如く广大であつた。かくて久留米一藩の支配的學風は全く崎門學派の影響下に在り、寛政、享和の頃に至つては、崎門の学徒は士民の隔てなく彪然たる交遊圈を構成し、名を文學に仮つて陰に大義名分の講明に務めて居たのである」

まさに、こうした久留米の氣風こそが、勤皇の志士高山彦九郎や唐崎常陸介をこの地に強く引き付けたのである。

合原は、寛文三(一六六三)年、三瀧郡住

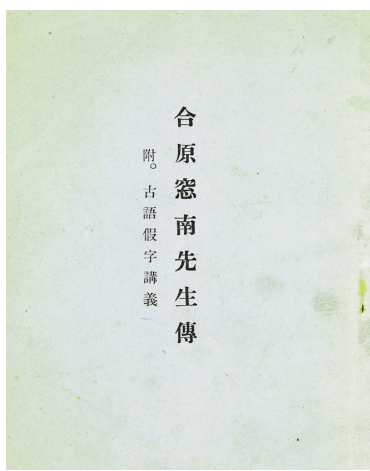


吉村（現久留米市安武町）で生まれた。遠祖は草野氏山本郡（三井郡）発心城主・草野鎮永、父道秋は医師だった。合原は幼少から学を好み、十歳で出家して僧となったが、その後京都、江戸へ出て儒学を修めた。壮年となって還俗し、崎門正統派の浅見綱斎に入門している。恒屋一誠が編んだ『合原窓南先生伝』（昭和十八年）には、「道を信ずること愈篤く、行を研ぐこと益々精く、特に性理易学に長じ其名京師に震ふ」とあり、門人の広津善藏（藍溪）が書いた碑文には、「先生生れて頓悟、自ら読書を好み、年十一出家僧となり法を四方に求む。既に壮にして自ら其非を悟り、蓄髪儒と為り、講学愈々篤く、礪行益々精しく、名一時に震ふ」とある。

派が併存していた。藩主則維は、合原とともに、仁斎門下の湯川丙次を招聘している。そして、合原と湯川に、正徳令（藩政条目事目）を作るよう命じた。同令は、条々・掟・添書（以上家中）、寺社掟目・在々掟・町中掟に分かれた広範囲の法令で、正徳三（一七二三）年に発布され、久留米藩の典範となった。

### 数百人の門人

合原は、則維の絶大な信頼を得て、十余年間、久留米藩の教育に従事したが、享保八（一七二三）年秋、病のため退官隠棲を願い出て、上妻郡馬場村（現八女郡）に隠棲した。隠棲したとはいえ、藩の政治に関して相談を受け、重要な役割を演じていた。当時、久留米藩と柳河藩との境界の川である矢部川（当時御堺川）の水利と水害防禦をめぐり、両藩は互いに、堤防を川面に突き出すなどして、自藩の便利のみ計り、対岸が崩壊することを顧みなかった。一方が堤防を水面に築き始めると、他方がさらに一段と高い堤防を築くという争いが絶えなかった。



合原窓南先生傳

附。古語假字講義

合原は、宝永六（一七〇九）年十二月、久留米藩六代藩主有馬則維に召されて儒官となり、藩の子弟の教育に当たった。領内の庶民から儒官に登用されたのは、彼が初めてである。

当時、久留米藩では崎門学派と伊藤仁斎学

で両藩の紛争は解決されたのである。

しかし、隠棲以降、合原は与えられた俸米には一切手をつけずに蓄え、窮民救済、善行者への褒賞、村の公共事業のために拠出した。恒屋一誠は「其廉潔実に感ずべきなり」と称えている。

馬場村での隠棲生活は十一年に及び、この間、国老以下多くの藩士や周辺の庶民が合原の学徳を慕い、その教えを受けた。当時の門人は数百人と伝えられる。

享保十八（一七三三）年八月、合原は第七代藩主頼重により再度、登用され侍講となっている。その四年後の元文二（一七三七）年八月二十日、合原は死去した。享年七十五歳。明治三十六年十一月、八女郡教育会が同郡の先賢祭を営み『先賢育英之一班』を刊行、筑後の儒宗として劈頭第一に合原の事蹟を掲げた。

大正九年十月には、安武村の有志が、福岡県教育会三藩郡教育支会、筑後史談会の後援を得て合原の遠忌祭を挙行している。このとき刊行されたのが、合原の遺稿『古語假字講義』である。同書には、「朱子文集曰。平居暇日。琢磨淬厲。緩急之際。尚不免於退縮。朱子士風の衰へたるを嘆いて言ふ、平生家に居て暇有る日志を高うし氣を盛にして専ら文武をあげみ、是を精うる事工人の玉を琢て磨ぎ刀を淬てとぐが如し、然るに急難起りて死生決する際に至ては、前後顧慮し志恐れて退き縮る事を免れず、平生文武をときみがき

するものさへ尚如此」とある。

『古語假字講義』のほか、合原は『四書資講』、『太極図説資講』、『初学筌要』、『読書録類纂』、『易本義頭書』、『鬼神魂魄二弁』などの著作を遺している。これらの著作からは、易に関する学識の深さも窺える。昭和十一年七月には、八女郡上妻村教育会が合原の塾の跡地に標木を建設したが、現在は不明になっている。

### 九州望楠軒―有馬主膳の「即似庵」

高山彦九郎や唐崎常陸介を引き付けた久留米の気風は、合原の門人たちによって養われた。楠本碩水が編んだ『崎門学脈系譜』によると、合原は岸正知、稻次正思、杉山正義、宮原南陸、不破守直など錚々たる門人を生み出した。

岸正知は、国老有馬内記重長の二男で、合原に儒学を学ぶとともに、神道を跡部良顕、岡田正利（盤斎）、正親町公通に学んだ。歌学書『百人一首薄紅葉』三冊を著している。正知の同族の岸静知は西依成斎、谷川士清に師事している。

稻次正思は、合原に師事し、野史や小説などを広く読み、さらに武事・故実を研究して『甲冑考略』等の著作を遺している。

杉山正義は易の研究を進め、『易経本義和解』を著した。

宮原南陸は、家老岸氏の家臣宮原金太夫の子で、合原に師事した後、多くの門人を育て

た。南陸の子宮原国綸（桑州）に師事したのが、幕末の志士真木和泉である。真木の姉駒子は、国綸の長男宮原平左衛門に嫁している。

不破守直は合原に師事するのみならず、西依成斎にも学んだ。さらに谷川士清にも教えを受けている。彼の門人として活躍したのが有馬主膳（守居）である。有馬は、唐崎常陸介、高山彦九郎をその別荘「即似庵」に迎えた人物である。

三上先生は「主膳此地に雅客を延いて会談の場所とし……筑後闇斎学派の頭梁たるの觀あり、一大老楠の下大義名分の講明に務め、後半世紀に及んで其孫主膳（守善）遂に真木和泉等を庇護し、此別墅を中心として尊攘の大義を首唱せしめるに至つたのである。此庵も亦、九州の望楠軒と称するに足り、主人守居も亦これ筑後初期勤王党の首領と称すべきであらう」と評している。



生地、久留米市安武町にある窓南の墓

## 山本七平『現人神の創作者たち』

を通して崎門学を考える

小野耕資

山本七平『現人神の創作者たち』が描こうとしたもの

巷間に知れ渡っている書物の中で、崎門について触れているものに山本七平『現人神の創作者たち』がある。この本は「尊皇思想の発端」として崎門学を指摘し、浅見綱斎『靖献遺言』、栗山潜鋒『保建大記』、三宅観瀾『中興鑑言』についてはその内容まで紹介している。

ただし本書は崎門学を戦時中の「呪縛」の発端とみなし「徹底的解明」と「克服」を目論んだものであると宣言していることから、崎門学徒はあまり取り上げて来なかった。

しかし山本は「現人神」の創作者を二十年以上の歳月を費やして探してきたと述べている。単に忌むだけではこれほど長い期間関心が続くものだろうか。また、後述するように、山本七平という一人の人間のルーツを考えたとき、単純に崎門の思想を全否定するためだけに書かれたとは言い切れない所がある。本稿では『現人神の創作者たち』の細かい論旨を紹介しないが、わたしが気になった個所に触れつつ、崎門学について論じてみたい。

### 幕府正統論の「まやかし」

山本が単純な崎門の全否定ではなく、もう

一段深いところで考察しようとしていることは、『現人神の創作者たち』の最初に既に示されている。即ち山本は吉田満を引用しながら、戦中派は自らを戦争に駆り立てた一切のものを抹殺したいと願ったが、一方で戦後の自由、平和、人権、民主主義、友好外交の背後にも「まやかし」があると直感していたと述べたうえで、戦後社会は敗戦の結果「出来てしまった社会」であり、一定の思想のもとに構築した社会ではなく、更にこの「出来てしまった」秩序をそのまま認め、統治権にかなる正統性があるか問題にしない「まやかし」があるという。そしてそれは承久の変の結果「出来てしまった」幕府体制ときわめて似ているという。北条泰時は承久の変で後鳥羽上皇らを配流しておきながら「天皇尊崇家」である「不思議な存在」であり、「貞永式目（御成敗式目）」には「統治権を幕府が持つ」とは一切書いていない。更に貞永式目はそれまで朝廷で制定された「天皇法」を否定するものではなく、「あたりまえのこと」を取りまとめただけだ、と考えていたことを紹介する。

ここで留意すべきことは山本七平という作家は『日本人とユダヤ人』『空氣の研究』などの著作にも共通しているが、こうした曖昧模糊とした体制を、その外にいる者として批判的に見ることを大きな特徴とした作家であるということだ。即ち結論を先取りすることになるが、『現人神の創作者たち』は戦時下を経験したものとして、そこで唱えられた「現

人神」の「徹底的解明」と「克服」をせねばすまない自己（＝崎門否定）と戦後的、幕藩体制的曖昧模糊とした正統性の不明瞭な社会になじめない自己（＝崎門的）の両面が矛盾しながら存在しているのである。

### 山崎闇斎＝内村鑑三

『現人神の創作者たち』では、山崎闇斎を内村鑑三になぞらえている。思想に殉じる態度、批判者への舌鋒鋭い攻撃などからそう例えたのであるが、実は山本は内村鑑三の流れをくむ人間なのである。山本は、内村鑑三の弟子で内村の最晩年に義絶された塚本虎二に聖書を学んでいた。山本は「闇斎の場合、彼とよく資質が似、また彼の後継者ともいえる浅見綱斎もまた彼のもとを去った。だが闇斎の死後、それを悔い、香を焚いてその罪を謝したという。これなどはまさに、内村に最も囑望され、後継者と目された高弟との関係にそっくりである」という。もってまわったような言い方をしているが、この「後継者と目された高弟」こそ塚本虎二だと推測できる。また、山本は『靖献遺言』を聖書になぞらえている。聖書も靖献遺言も、ともに残された生者が自分の意志で変更できない絶対的規範として人々に働きかけるものとして解釈している。

繰り返すが山本のこの本は終始崎門を突き放した態度で見ている。その同じ人間が自ら信じる聖書と自ら批判する『靖献遺言』を同



じ構造だと論じているのである。ここに山本七平の複雑な心理を見たような気がしたのである。

ちなみに山本は『靖献遺言』に出てくる義士を、「中国人は（中略）政治に救済を求める。それゆえに政治に殉教できる。しかし日本人は決してそうではない」（『静かなる細き声』）と書いている。ここでいう「政治」とは「政権」とか「政局」の意味ではなく、「政治思想」の意味である。「決して」とまで言い得るかはともかくとして、そもそも政治思想を論じた書物が少ないということはできるだろう。『神皇正統記』をはじめ政治思想を論じたものは大なり小なり絶対的な正義を論じている。政治を論じてそれがなかなか思想哲学の領域まで昇華しないとは言えるだろう。こうした「日本的」側面になじめないのもまた山本七平の一面なのである。

### 湯武放伐論の否定

山崎闇斎を嚆矢とする崎門の思想の一つに湯武放伐論の否定がある。湯武放伐論とは、無能で暗愚な君主を天下のために討ち、次の君主になることである。崎門はこれを否定したと聞くと、「なるほど、どんな暗君でも絶対的に従うことを要求した思想なのだな」とわかった気になってしまう。だが、本当にそうなのだろうか。

よく、「君君たらずとも臣臣たれ」という。「君主は君主らしくらずとも臣下は臣下らし

くあれ」ということである。この「臣下らしい」とはいったいどういう態度を指すのだろうか。

浅見綱斎は『靖献遺言』で忠誠の模範たる人物を支那の歴史から選び、伝記や遺文などを紹介したが、そこで取り上げられている人物はいずれも悲劇的な状況下におかれても節義を貫いた人物が選ばれている。人物の多くが正統でない王に使えることを拒み、虐殺されたり戦死したりしている。それは「宗教的な心情に通ずる」（尾藤正英）ものであったし、「殉教」（山本七平）の性格を持った。君主個人への忠というよりは、「君臣の忠義」という思想に殉じる態度を求めたのである。つまり「彼（浅見綱斎）は、まず個人の変革をすなわち崎門学という疑似宗教への帰依とそれによる回心を求めた」（山本七平）。その点から見れば「湯武放伐論の否定」はもう少し抽象的な理解ができる。人間が肉体を持ち、欲がある限り、力を持つ者、勢いのあるものへの追従がしたくなる自分が出てくる。そうした人間のエゴイズムを見つめるからこそ、かえってそれに屈せず義を貫いた人間への称揚がある。湯武放伐は歴史の現実である。万世一系のわが国体でさえ、院政期など皇室の秩序が乱れたときにはその存亡を危うくした。そうした歴史の現実を見つめるからこそ、にもかかわらず万世一系を貫いているわが国體への誇りが生まれるのである。

時に崎門は湯武放伐を肯定する儒教にあつ

てそれを否定したところに大きな特色があると言われる。だがそもそも儒教は湯武放伐をどうとらえているのかという問題は複雑である。孟子が「湯武放伐論」を肯定し暴虐の

王であれば、これを討伐し徳のあるものが次の王に着くということは決して間違っていないと論じたと言われる。だが孟子は広く人民に放伐を訴えたのではない。自らが使える君主に、人民を第一に重んじる政治をするべく申し上げたのである。孔子は周公旦を夢に見るほど理想とした。周公旦は武王の弟で、武王亡き後その息子の成王を補佐した人物である。孔子、孟子の時代でさえ既に「正統な王」などというのは存在しなくなってしまうていた。だが古くから続く正統な王が徳によって統治することは儒教の道徳において間違いない善である。『論語』に武王の音楽を評して「美を尽くせり、未だ善を尽くさず」とあるが、これは武王の行いは輝かしきはあるが善くはないと暗に批判したものである。わたしは、儒教は放伐礼賛でないことは明白であると考え。崎門の特徴はそれを思想の中心に位置付け、絶対規範に高めたことであろう。

### 神儒一致は崎門の特徴か

神儒一致もまた崎門だけの特徴とは言いがけない。林羅山なども儒家神道を奉じている。その起源は藤原惺窩にある。

藤原惺窩の印象といえば、支那朝鮮崇拜の人というものであろう。藤原惺窩は明と朝鮮

に日本を占領してほしいと言ったという話もあるくらい的人物だからだ。また、支那朝鮮に渡りたいと願う鹿兒島から船に乗り込んだが、渡航がかなわなかった人物でもある。

だがそれとはまったく違う評価をしているのが江藤淳である。江藤は『近代以前』で、「渡明を断念せざるを得なくなった後の惺窩は」「聖人常の師なし、吾れ之れを六経に求めて足りなん」と肚を決めて、「戸を杜じ客を謝して」「四書新註」を頼りに独学で儒学を極めようとしたことに変わりはない。（中略）この新註の信頼すべきテキストがあれば師などはいらない、あとは独学で結構だという態度に変って行ったのは、師を求めて東シナ海の荒波をおかして明に渡ろうと考えていたことを思いあわせると、不思議なようにも思われる。おそらく鬼界ヶ島の波をながめ、そのあとで南浦の和訓本を発見したときに、彼の中で何かが変わったのである。つまり、彼は儒学の正統をたずねるために儒学を学ぶわけではない。自分の中の正統性の感覚をたしかめるために儒者になるのだということを、このときはつきりと悟ったに違いない」と論じている。つまり、藤原惺窩はたしかに明に憧れ、渡航も考えるような人物であったが、それに失敗してからのちはそうした明への憧れとは別の思いで儒学を学んだというのだ。

「自分の中の正統性の感覚をたしかめる」とは江藤なりの非常にうまい表現であり、藤原惺窩に限らずあらゆる人文学系の学問に心

惹かれる人間ならば通る感覚ではないだろうか。自分の心、そこには私心もあれば公の心もある。その由来を探れば自国の文化、歴史、文学、社会と無縁ではいられないからだ。人は公共心の一点で自国の歴史とつながっている。その感覚をより鮮明に、自覚できるようにしたい。それが学問の始まりではないだろうか。「先儒の成説なり。心と経と同じく処るは、我が心の公なり。同じく処らざるは、我が心の私なり」(『羅山林先生文集』)における惺窩の言葉」というわけである。

話がそれってしまったが、これを読んで以降、いったい藤原惺窩とはどういう人物なのだろうかと、考えずにはいられなくなったのだ。そもそも藤原惺窩は「新古今和歌集」や百人一首で有名な藤原定家の子孫であり、儒教だけでなく仏教や和歌などにも教養のあつた人物である。惺窩自身も長く僧籍にあり五山文学の教養の中で育つた人物であつた。当時の仏僧は仏教だけでなく教養として儒学その他も学んでいた。その中で儒学に興味を持ち、儒学に傾斜していくことになるのである。そんな中で豊臣秀吉の朝鮮出兵で捕虜となっていた姜沆と親しくなることが惺窩の思想を大きく展開させることになる。もともと、姜沆と出会う以前に明に渡航しようとして失敗しているの、このころにはすでに儒学に強く魅了されていたと思われる。

惺窩はそれまでの日本で多く伝えられていた儒学とは異なる朱子学を講じた。これは当

時にして革新的な新知識であつた。しかし、惺窩は単純に朱子学を輸入して述べていただけではなく、陽明学の考えも取り入れていた。翻訳学者にはならなかったのである。これは惺窩と儒学との出会いが出世によるものだけではなく、知的関心にこたえるものだったからに違いない。儒学は共同体と己との関係についての知識である。現世への関心は仏教より強く、それが儒学への関心へとつながったのではない。

ところで当時知識を有力者に講釈するということは大変な禁忌であつた。儒学は公家社会では明経道の清原家が講釈するものだった。惺窩やその弟子林羅山は、こうした清原家の秘伝をも侵す可能性があつた。同じように古くから伝わるものには公家社会に伝わる秘伝があり、それを無視することはできなかった。

惺窩や羅山はなぜ儒学の講釈が可能だったかという、公家社会と全く異なつた武家社会の学問を担う必要性があつたことと、惺窩や羅山は朱子学を基調として今までの儒学とは一味違うものだったからである。その意味で朱子学という体を装う必要があつたのだ。なお朱子学が幕府の官学と言われるのは松平定信の寛政異学の禁以降のことであり、それまで儒者の地位は不安定なものであつた。林羅山も家康の秘書として重宝されたに過ぎない。そもそも「儒者」なる職業が全く新しいものであつた。

惺窩は幼年より仏門に入り学問もそこで得たが、そこに飽き足らないものを感じて、儒者というそれまでに存在しない学者像を打ち出した。朱子学という外国の学問を借りて、伝統にとられない新たな存在を生み出した。伝統は欠くことのできないほど重要なもの。しかし伝統は時に利権と結びつき社会を縛る足枷にもなる。その兼ね合いは人類に課せられた永遠の課題かもしれない。

惺窩の朱子学は単純な外来思想の需要ではなかつた。古註ではなく新註を用いたが、純然たる朱子の徒ではなく、陽明学の考えも取り入れていた。また、儒学だけではなく、後に国学と呼ばれる日本古来の書に対する学問や和歌に対する関心も持っていた。日本的儒学や国学など、後の日本に大きな影響を与えた江戸の学問は惺窩をもつて先駆としなければならない。惺窩が世襲による秘伝を破つたことで、江戸時代は学問の時代となることができた。近き因習を破ることでより古くから続いた正統に近づくことができた。

この話を書いているときに、西洋思想にふれた明治人を思い出す。明治人は西洋思想に影響を受けたが、ほとんどの場合において自らの感覚で思想を選択、変質させ、日本の正統に近づけていった。

惺窩は若いころは確実に支那朝鮮にかぶれていただろう。しかし長じていくにつれて日本の正統に帰って行つた。それは福沢諭吉が和歌や儒学など学ぶ価値がないと言っていた

にも関わらず、長じると西洋かぶれの人間を「開化先生」と揶揄するようになったことを思い出す。

あるいは耶穌教や社会主義を信じた者も、日本に道徳や秩序を取り戻すために外来思想の力を借りる必要があると考えたからであつた。日本的儒学の広まりがあつたからこそ、単純な外来の模倣にならなかつたといえるのではない。ただし単純な模倣に留まらなかつたとはいえ、林羅山が天皇は呉の太伯の子孫であるという「天皇中国人説」を称えるなど大いに問題があつたことは言うまでもない。

### 闇斎の学者像

先ほども述べた通り「儒者」という職業は当初初めて生まれた新しい職業で、藤原惺窩から林羅山に至って少しずつ具体化したものだ。

闇斎は羅山の幕府への庇護を頼む姿勢を批判したが、平安時代以来世襲で継承されていた学問の講釈権を公共の場に引きずり出した点では共通していた。

羅山の幕府秘書的儒者像とは異なり、闇斎が体現した学者像はむしろ宗教指導者に近いものであつた。闇斎も、また闇斎が学んだ南学の谷時中も(余談ながら惺窩も羅山も)僧侶出身で僧侶時代に儒学を学び還俗した人間である。当時、有力者以外の人間で儒書にふれる可能性があつたのは僧侶だけであつた。儒教は仏教とともに学ばれていた。後に仏教



を否定する闇齋ではあるが、山本七平が吉川幸次郎を引用し指摘したように「三步下がって師の影を踏まず」的師弟関係は、儒教というよりむしろ仏教的である。

崎門の学風は字句を学ぶというより精神修練を重んじるところがあるが、それは闇齋が描く（羅山とは異なる）学者像と無縁ではないのである。

### 君臣子弟の関係は絶対か

山崎闇齋は林羅山の、僧体で、有力者の庇護を受けるありかたを厳しく批判している。それは思想の次元にまで及んでいる。先ほど述べた通り惺窩や羅山も単純なシナ模倣ではないとはいえ、大いに問題があったことは言うまでもない。

山崎闇齋は「たとえ敬愛する孔子、孟子が攻めてきたとしても（日本人として）孔孟と戦うべきだ」という教えを説いた。通常この逸話は国家への忠、日本精神の唱道として受け取られてきた。だが違う読み方も可能ではないか。

山崎闇齋は朱子にかぶれて常に赤いものを身に着けていたような人間だった。当然、儒学を篤く信じていた闇齋が「孔孟とも戦え」と述べたのは、「たとえ自らが道を教わった師匠であっても、己の信念に反するならば対峙しなければならぬ」と説いたとも言える。崎門は君臣師弟親子の上下関係を説いたが、同時に一介の思索者としての矜持を、その生

きざまで示していたともいえるのではないか。根拠薄弱と言われてしまうかもしれないが、峻厳で述べて作らずを重んじる崎門の学風から、これほど破門される高弟が出るというのも、上記のようなことではないかと思うたのである。

### 浅見綱齋と赤穂事件

山本七平が「応用問題」として、崎門の思想が実際の事件に対してどういう反応を示したのか触れた個所に、「忠臣蔵」で有名な赤穂事件に関する記述がある。

赤穂事件については、佐藤直方などが否定的だったのに対し、綱齋は肯定の論陣を張った。

山本七平は、綱齋が赤穂浪士を称揚することにより、暗に義があれば幕府がもたらす秩序に背いても称揚されるべきだと考えていたと論じている。赤穂浪士が浅野内匠頭の遺志を絶対化し、それを実現することは善であるように、歴代天皇の意志を絶対化し、幕府を撃つことは善であるというロジックを立てようとしたのではないかと論じている。そういう志士が現れるのを秘かに期待していたのではないかという。歴代天皇の遺志に則していると判断すれば幕府の法に背こうがそれは善なのだ。それが明治維新をもたらしたのだと論じている。

明治維新には確かに有効であったが、維新後それを清算せず表から消して「まやかし」

を行ったため、戦争期に「猛毒」をもたらすことになったと論じている。

### まとめ

山本七平は、明治政府が「志士たちの聖書」でありながら、崎門の影響を消したことを論じている。そして消してしまったからこそ「呪縛」となったのだと論じている。『現人神の創作者たち』は、「綱齋など崎門の学徒が狂信的な天皇崇拜を唱え、それによって明治維新がなったため日本人はそれに拘束されることとなった」などというつまらなくてくだらないことを書いたと思われる記述も多いのだが、あえて違う解釈を試みたい。

「出来てしまった」秩序をそのまま認め、統治権にいかなる正統性があるか問題にしない「まやかし」は明治時代にも生み出されたのである。明治時代に、統治権の正統性を問題にせず秩序の変更を許さなかったために生みだされたのが「現人神」であったとすれば、「現人神の創作者たち」は維新の元勳であり、「現人神」とはそうした元勳の自己保身に皇室が利用された姿であるということも言える。「玉座をもつて胸壁となし、詔勅をもつて弾丸に代え」とは尾崎行雄が桂内閣を弾劾した有名な一節であるが、まさに真の天皇親政の大理想が忘れられ、皇室の真の姿を示す言葉がその陰にはびこる佞臣をのさばらせる過程は、皇室を崇敬するわれわれにとっても重要な思想的課題を与えられたと言えるのではないだろうか。

## 『若林強齋先生大学講義』を拜読して②

三浦夏南

前回に引き続き、若林強齋先生の大学講義を読み進めて行きたい。今回はこの書になぜ大学という名が付いたのかを詳しく先生が解説される場所である。

大学の大きな字は太の意味ととることができ、この場合は学を尊んで付けた言葉となる。高太至極の学といった意味である。しかし強齋先生はこの解釈を痛烈に批判される。

「前にもくれぐれ言うた通り、学は飢えて食らい、渴して飲むと同じ事じやに、何の故を以て高尚な学じやのと褒美すること褒めることもあるうようがない。これはとてもない違いぞ。」

前回から先生が繰り返し教えられているように、学は飢えては食らい、渴しては飲むという人として当然行うべきこと、止むにやまれず行うことである。そこに、高太至極といったような尊ぶ名が付くはずがない。もしそのような言葉が付くならば、学とは当然のものではなく、付け足しのものとなってしまふ。それでは学とさえ言えば通ずるものをどうして大学と大の字を付けられたのか。

「大小に対して言う大で、小学に対して言う大学ぞ。小学大学とて学に二色あるではないけれども、小子童蒙にほどこすと大人成人にほどこすには、自ずから大小浅深がなくてか

なわぬことぞ。二筋でないは、朱子小学の題辭に、小学はその根に培いと言ひ、大学はその支を達すと言うて、一本の木で例えを引いて仰せられたぞ。小学は大学の下地、大学は小学から響いた名、小学は大学から響いた名で、ここが大小学相離れては学にならぬと言う大事の旨ぞ。」

大とは大小の大であり、大は大人、小は子どもを表している。学問に二種類あるわけではないが、子どもに学問を施すのと、大人に学問を施すのでは、そこに自ずから大小浅深が出て来なければならぬ。朱子はこのことを一本の木の例えで示している。小学は大学の下地であり、小学という名称も大学と響き合う名、大小学が離れては学問にならないとまで先生は言われる。自分も含めて現代の学問というのはこの小学から大学へ、基礎から発展へという学の道のりを忘却しているように思う。江戸時代の学問を振り返ってみると、まずは幼い頃からの四書五經の素読があり、暗記するまで読み習った上で段階的に語のとりさばきに入り、十分に熟達した上で、その意味を咀嚼し、最後は信仰として体得して行かれた。吉田松陰先生や、二宮尊徳翁の伝記を紐解けば、農作業をしながらの素読、薪を運びながらの朗誦と、学問は生活の中に深く入りこみ、頭というよりも体で覚えて行かれたようである。それに比べて現代の学問を省みれば、学校教育の知識偏重教育は論外として、国体に基づいた正学までが、成人後

の付け焼刃で済ましてしまう事が多い。古人が古典の言霊を尊び、言葉を体に染み込ませて行つた小学の部分が欠如しているように見受けられる。自分の学問においても学に志を立てたのは大学入学後であり、幼年期からの素読、朗誦の積み重ねを経ずに今に至っている。過去を悔いても仕方がない。今からでも朗々と古典を拝誦し、体に染み込ませて行くことを意識して実行しなければならぬと思う。これは礼儀作法にしても、和歌漢詩の嗜みにおいても、そして士としての武の鍛錬についても同じく言えることである。まさに本立ちて道生ずである。この小学の欠如が頭での国体理解から根の無い社会変革へといった深みと厚みの無い運動を生んでしまうのである。もつと深く厚い信仰と至誠ある人格に基づいた明明徳、新民の大学の道を踏み行ふにはこの小学と大学が不二一体であるという自覚から始めなければならぬ。この朱子と強齋先生の教えに当り、自ら切に思い当たるところがあつたので詳しく記した。

「この大学中庸も一部始終揃わねば全体でないじやによつて、首尾始終揃わつて、それぞれのあやを別けねば埒があかぬ故、これは経文、これは伝文と逐一分けて見せられたぞ。」

次に論語、孟子は集註であるのに、大学、中庸は何故に章句であるのか。論語、孟子は一つ一つの章が初めから明らかに分かれていて、大学、中庸は一続きの文章で区切りが

ない。これを経文、伝文、綱領、条目と整然と朱子が分けられた。故に章句という。これを先生は人間の体に譬えて説明しておられる。人は頭だけでも人とは言えず、手足だけでも人とは言えない。頭あり、腹あり、手足ありすべてそろつて初めて人と言うことができる。このようにあやを分かつたのが章句である。崎門では講義を重視したと言うが、先生の講義は細かく、詳しく、そして親切である。この章句と人体の例え話もその一つであるが、少し難しい話には親しく身近な例を引かれて繰り返し説明される。

章句、集註という言葉は謙讓の言葉である。章句は全体の意義は解釈することができないが、聊か章句を分かつたものということ。集註は自分一人では到底註を作ることではできないが、諸家の説を集めてようやく註することができたという意味である。しかしそこに朱熹集註朱熹章句と名乗つてあるのはどういうことかと言へば、先生はこう教えられる。

「この集註章句は真に孔孟の御心に必至とかのうて、天地鬼神で正しても疑いない處あつて、即ち斯様に名乗られて、もし誤るあれば、その罪を掩わぬとある旨ぞ。」

名を記したことは無論名を後世に残さんためではない。孔子が我を知るも、我を罪するも春秋であると言われたが、この集註章句は孔孟の御心にかない、天神地祇に問ひ質しても疑いのないところがあるとの確信から、もし誤るところがあれば、その罪は全て引き

受けんとの強い覚悟から書かれたものである。

「司馬溫公通鑑に心を尽くされ、我一生の精力悉くこの書に在りと言われたが、我が大学におけるも如此じやとまで仰せられた書ぞ。実に学者の専心反復して熟読すべきことぞ。」

その覚悟は朱子が司馬溫公の通鑑に尽された努力に匹敵する努力を大学一書に込められた所から来ている。学者はこの朱子の高く深い志を慎んで引き継ぎ専心反復して熟読すべきであると最後に強く締めくくられている。大学と言へば、四書五經の入門であり、その分量も他の書に比して少ないが、朱子及び崎門の先生方が重く見られたことはこの通りである。この書の重大性を深く認識した上で、決して一通りで済ませることなく、繰り返し繰り返し読み込んで行かなければならない。

ここで大学という書の名前の説明が終わる。大学、字数にしてはたった二字の書名にこれだけの細やかで親切な講義をされる先生に驚かされる。人生そのもので大学にぶつかつて行かれた先生の志に恐れ入るとともに自らも至らぬ身ながらもこの境地を目指して行かねばと思う。次は程子の言葉に入るの今回ばかりは拙い筆を置かせていただく。



## 君民一体の祈願こそが、 わが国の永遠を守る

（顧問）坪内隆彦

わが国において、「国の永遠」はいかにして確保されてきたのか。

崎門学派においては、「天皇陛下が国の平安と国民の幸福だけをひたすら祈り給い、国民は玉體の安隠と国の静謐だけをひたすら祈り奉る。この君民一体の祈願こそが、国の永遠を守ってきた」ととらえている。

行幸啓もまた、国の平安と国民の幸福だけをひたすら祈る天皇の重要なお務めの一つにほかならない。古代においても、行幸啓は単なるご移動に留まらず民の実情を把握するきっかけとなったと推測できる。行幸が多かった天皇としては聖武天皇が挙げられる。

戦後においても、先帝陛下は昭和二十一年以降、一時期の中断をはさんで昭和二十九年まで全国巡幸をお続けになった。そして、今上陛下は、全国植樹祭、国民体育大会、全国豊かな海づくり大会の「三大行幸啓」を中心に全国への行幸啓をお続けになっている。それが、戦後憲法が規定する「象徴としての地位に基づく公的行爲」だとしても、その本質は、国の平安と国民の幸福への祈りである。また、陛下は自然災害などが起こるたびに現地を訪れ、被災者の慰労と激励に献身されている。東日本大震災における両陛下のご対応等は記憶に新しいところである。

崎門正統派を継ぐ近藤啓吾先生は、平成十七年七月八日に執筆した「神いますの確信」において、次のように書かれている。

〈天皇は祖宗の御霊に文字通り「祈り」を捧げられてをられるのである。天皇の御心のうちには、祖宗の神霊は永久に生きてをられるといふ確信があらせられる。故にこの御神霊に心から、時には御身に代へられても、国の平和と民の幸福のために力を添へたまへと祈願してをられるのである。日本国民としてもしこのことが理解できぬならば、「大嘗祭」を始めとする一切の天皇のお祈りの意味がわからぬものである。〉

天皇は御先祖の御心をそのままに御自身の御心として、御先祖に祈つてをられる。私どもは畏多いことであるが、その天皇の御祈りの御姿に天照大神を感じ得る申上げるのである。即ち天照大神は、天皇の御祈りのうちに生き続けてをられるのであつて、その御姿は私ども日本人の姿の最も純粹なる原型である。即ち私ども、父祖の子孫の幸ひを思つて努力されし思ひに感謝し、感謝の祈りを続けるところ、私どもの父祖は、私どもとともに生き続けられるのである。……皇室の御祈願は私ども国民の祈りの根本であり原型であるとする所以は、一にここにある。〉

そして、近藤先生は「私どもが最も純粹なる祈りをその父祖の神霊に致す時、祖孫一貫一体となりて、『心神』の存在を感じ得る」と書かれている。

我々国民が陛下の祈りに天照大神を感じ得し、感謝の祈りを奉ることによって、君民一体の祈願が完結するのではないか。であればこそ、両陛下がお続けになっている行幸啓についても、国民の意識が改めて問われなければならない。

昨年七月、九州北部が稀に見る豪雨に見舞われ、多くの人命が失われた。災害発生直後から、特に被害の大きかった福岡、大分両県被災地は、天皇皇后両陛下からお見舞いとお労いの温かいお言葉、またお心のこもったお見舞金を賜った。両陛下は豪雨被害の直後から被災地を早い時期に見舞いたいとご希望されていた。そして、十月二十七日から、天皇皇后両陛下は被害の大きかった福岡県朝倉市、大分県日田市などを訪問されたのである。

特に被害が甚大だった朝倉市杷木地区で、両陛下は同県東峰村の被災者を含む遺族六人とご対面された。自宅が流木で押しつぶされ、妻の麗子さん（当時六十三歳）と出産間際の娘、江藤由香理さん（二十一）、孫の友哉ちゃん（一）を失った、朝倉市の洲上洋さん（六十五歳）に対して、天皇陛下は「本当に残念なことでした」と声をかけられた。

また、自宅が流され、妻の初子さん（六十九）が犠牲となった同市の小嶋重美さん（六十九）は、自身も濁流にのまれ、愛犬ゴンタとともに助かった経緯を説明した。皇后陛下は「寒かったでしょう」と気遣われた。

天皇陛下は最後に全員に向かい、「元気に

過ごされますように」と話された。これに続き、皇后陛下が「ゴンタも」と付け加えられた。小嶋さんは懇談後に「最後に犬の心配までしてもらって、ありがたい」と涙をぬぐったという（『産経新聞』平成二十九年十月二十七日付）。

この行幸啓に対して、福岡、大分県では様々な奉迎式典が企画されたが、行幸啓に先立ち祈願祭が厳かに斎行されたことこそ重視すべきである。例えば、筑豊地区で民族運動に挺身している奥田豊將氏を代表とする「天皇陛下皇后陛下御来県奉迎筑豊委員会」は、天皇皇后両陛下の朝倉市への慰霊と激励に対して、両陛下のご安全と行幸啓のご成功を祈念して、十月二十二日、田川市宮尾町の春日神社において祈願祭を斎行した。

祈願祭には、二場公人・田川市長、松尾勝徳・小竹町町長、谷口金蔵・田川商工会議所会頭のほか、筑豊地区議員団が参列、福岡で崎門学の勉強会を主宰している奥田親宗氏（公益社団法人日本マレーシア協会福岡支部長）が納め玉串を捧げた。

我々は、天皇皇后両陛下の行幸啓に対して、「君民一体の祈願こそが、国の永遠を守ってきた」ことを確認する重要な機会として、全身全霊でお応え奉るべきことを、改めて認識すべきではなからうか。

## 活動報告

平成二十九年七月一日『崎門学報』第十号  
発行

平成二十九年七月二十日、崎門学研究会有志で明治維新の先覚藤井右門の墓参をした。

平成二十九年八月六日、浦安で崎門研第七回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表をはじめ有志四人が参集した。前回に引き続き栗山潜鋒「保建大記」を理解するため、谷秦山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書六十五ページから七十七ページまで輪読した。今回の主な内容は、以下の通り。

シナが王朝ごとに国璽が違っていたのはわが国の神器が皇祖から伝わっているのと全く異なる。故に神器を持つている君主が正統なのは疑いない。保元の乱でいえば後白河天皇方が正統である。平清盛は母が重仁親王の乳母でもあったことから、上皇方が天皇方かどちらに付くのか微妙であるとみられていたが、鳥羽法皇の違勅と称した美福門院の招きに応じ、天皇方として立った。これは清盛の勲功であつて、後の振る舞いが良くないからと言ってこれをほめることをためらうべきではない。これは源為義が、自分は老いているし悪い夢も見たからと固辞しようとしたものの、ついに上皇方に説得されたのと好対照である。崇徳上皇も重祚の夢を見ておられたよ

うだが、神武天皇が八咫鳥を夢に見て得られたのとは異なる結果となった。夢はみだりに信じてはならないが、夢の靈験が全くないとも言い切れない。（小野）

平成二十九年八月二十八日、新橋で崎門研第八回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表をはじめ有志八人（うちスカイブ四人）が参集した。前回に引き続き栗山潜鋒「保建大記」を理解するため、谷秦山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書七十八ページから八十三ページまで輪読した。今回の主な内容は、以下の通り。

保元の乱において、崇徳上皇方は源為義がいったん関東に退き勢力を蓄える献策をしたが、藤原頼長は却下した。また、源為朝が夜討ちと火を放つことを献策したが、藤原頼長は、戦いは堂々と言うべきであるし、翌日興福寺の僧兵が来るから必要ないと退けた。

潜鋒が思うに名將は寡兵でも奇策を用いて勝つ。大軍は必ずしも良いとは限らない。大軍を使いこなせるのは大將が優秀だったからである。藤原頼長は兵法に疎いこと甚だしく、無策というべきである。結果上皇方は敗れ藤原頼長は矢に当たって死ぬのである。

更に今回は、「保建大記打聞」に加えて近藤啓吾先生の「日本の神」を今回は六ページから十一ページまで輪読した。主な内容は以下の通り。

自分のいのちは父母のいのちを受け継いで

いる。父母は祖父母のいのちを受け継いでいる。そうして遡ると神代にさかのぼる。父母が子を大切にし、子が父母を大切に思うこそ神道の基本精神である。古代ヨーロッパでも家族神（ラリーズ）がいて家族を一つにまとめていたが、そうしたラリーズの信仰を統合し守ってきたのがご皇室である。ご皇室は国の安らぎと民の幸いの成就に向けてお誓いされてきた。長い皇室の歴史のなかでは、そうしたお誓いを守らんとするために非常に苦勞された天皇もいらした。その御一人が後醍醐天皇である。また、北畠親房がわが国の国柄と皇室のご責務について後村上天皇の御心得として記したのが『神皇正統記』である。（小野）

平成二十九年十月二十二日、浦安で崎門研第九回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表をはじめ有志四人（うち愛媛から二人スカイブで参加）が参集した。前回に引き続き栗山潜鋒「保建大記」を理解するため、谷秦山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書八十三ページから九十六ページまで輪読した。

今回の主な内容は、以下の通り。

藤原頼長は学問に通じているが、それは章句の知識が多いというだけで、中身は軽薄な人間である。信西の方がその点では優れているからこそ、頼長は賊として死んだが信西はそうでなかったのである。ただし利を見て義

を忘れるところは変わりない。

崇徳上皇が剃髪し讃岐に行くことになったのは命を惜しんだからであり、ならば最初から譲り合いが出来なかったのかと嘆かわしいところがある。

源義朝が保元の乱後、父を処刑してしまったのは人倫が乱れた点で大いに問題がある。伊東祐清のように功を辞して父に従う正気を持たなかった。

今回の輪読箇所は潜鋒、秦山の人物評価が多かったため、輪読しながら議論しつつ読み進めた。（小野）

平成二十九年十月二十九日、日本学協会（理事長・平泉隆房先生）主催の東京崎門祭に参加した。講話では、但野正弘先生が「崎門の高弟・水戸の忠臣 鵜飼鍊齋」と題してお話された。但野先生は、貞享元（一六八四）年五月、彰考館新刊造営の賀宴で、鍊齋が賦した七言絶句を紹介された。

華館鼎新す修史の編

幽微を闇いて二千年を顕はす

公に至り参酌す百家の記

姦賊逃れ難し直筆の権

平成二十九年十一月五日、浦安で崎門研第十回保建大記の勉強会を開催した。前回に引き続き栗山潜鋒「保建大記」を理解するため、谷秦山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注『保建大記打聞編注』を使用）を読み進めた。今回は、同書九十七ページから百二ページまで輪読した。

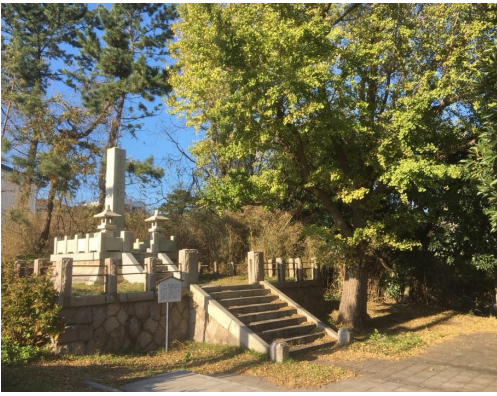


今回の主な内容は、以下の通り。

古来政治の在り方は名を以て貴賤を明瞭にすることと、器を以て賞罰を明らかにすることである。これを削僧にすると人が尊ばなくなる。仁愛が過ぎると柔弱になる弊があるが、大将を（礼儀に留意せず）斬首する残忍慘酷に比べれば天と地ほどの差がある。信西は博覧強記の俊才であるが、みだりに（源為義らを）死刑にしたのは王者至誠大公の政ではなく後に禍根を残した。

崇徳上皇は流された讃岐で大魔王となつて天下を悩ましてやると恨みごとを遺して崩御された。崇徳帝後白河帝の兄弟の友愛がここまで損なわれてしまつては、御恩が万民に行き渡るはずもなく、天も禍を下し、天下が乱れたのは当たり前のことである。（小野）

平成二十九年十一月七日から新潟に赴き、竹内式部先生所縁の地を以下の順に回った。



①日和山共同墓地の一角にある  
竹内式部先生の墓



③白山公園に立つ巨大な先生の  
顕彰碑（撰文は星野恒）



②竹内式部先生出生地  
に立つ標柱



⑤西海岸公園内にある先生の  
坐像(左には『日本書紀』)



④本町通十四番町にある浄信院の境内に立つ先生の記念碑、住職曰く、竹内先生記念碑の中でも最古の物。由来は、岐阜県出身の今枝恒吉なる役者が竹内先生を演じて深く感銘し、記念碑の建造を思い立ち、最初は白山神社に依頼したが、断られたためこの寺院になったとのこと。明治三十五年建碑。

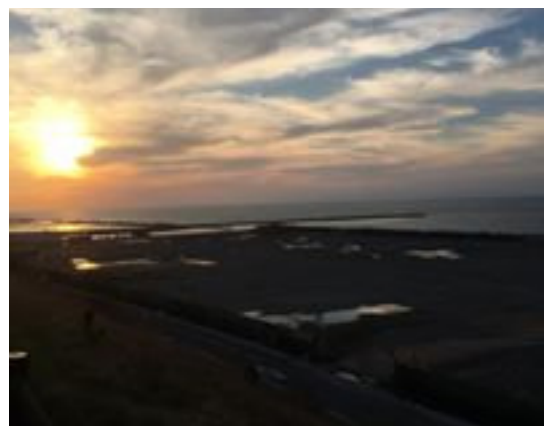


落ち、墓碑も随分簡素なものであった(写真)。石柱の側面には「享保十三年戊申（一七二八年）秋七月廿四日 孝子竹内宗詮建之」とあり、「宗詮」とは、式部先生の父の名であることから、「省敬」は、先生の祖父であると推測



境内には「正庵竹内省敬先生之墓」と銘記された石柱が亀の台座の上に立っていたが、亀の首は欠

平成二十九年十一月八日（新潟旅行二日目）、竹内家の菩提寺である本覚寺を訪れた。西堀通り六番町にある（左写真）。

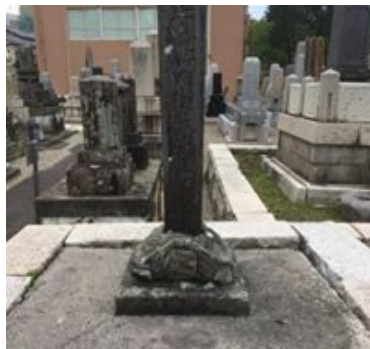


夕陽に映える日本海





が、結局遺品が集まらず中は空っぽとのこと。本堂のすぐ側にある祠堂まで案内して下さった（写真）。



また座敷に上げて頂き、檀家が寄進したという式部



される。

墓碑を

参拝した後、住職の話を伺う事を得た。それによる

と、住職の祖父で、三代

代先代の住職が、式部

先生を深く尊敬してお

り、先生の遺品を奉納

するの為に祠堂を境内

に建立した

た（写真）。

また座敷に上げて頂き、檀家が寄進したという式部

た（写真）。

また座敷に上げて頂き、檀家が寄進したという式部

た（写真）。

た（写真）。

先生の立像を見せて頂いた（右写真）。さらに、ご親切にも、上述した先代の住職が書いたという、「宝暦帝師贈正四位竹内式部先生史伝」の緒言をコピーして下さった。その内容は大変興味深い事が書いてあるが、この文章に続いて、頭山満翁の名による祠堂落成式の際における祝詞が収められているのに喫驚した。祠堂の落成式に頭山翁が参列されていたのだ。充実した新潟旅行であった。（折本）

平成二十九年十一月二十五日、京都崎門祭で講演する坪内顧問に随行する形で京都に赴き、崎門学の祖・山崎闇斎先生の垂加社を祀る下御霊神社を訪問、出雲路敬栄宮司と対面、誠に貴重なお話を伺うことができた。その後闇斎先生、浅見綱斎先生の墓参。さらに、『靖献遺言』で固めた男、梅田雲浜先生の子孫梅田昌彦先生のお宅にお邪魔し、誠に貴重な資料を拝見した。

翌十一月二十六日、京都八坂神社で開催された崎門祭で坪内顧問が講演（写真）。所功先生や水戸学研究の大家安見隆雄先生、湊川神社の垣田宗彦宮司等錚々たる先生方も参列。



式部先生の立像

平成二十九年十二月三日、浦安で崎門研第十一回保建大記の勉強会を開催した。前回に引き続き栗山潜鋒「保建大記」を理解するため、谷泰山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注「保建大記打聞編注」を使用）を読み進めた。今回は、同書百二ページから百八ページまで輪読した。

今回の主な内容は、以下の通り。

保元の乱の時期世がここまで乱れた責任を、後世の人の多くは美福門院に帰している。それはもとより当たっている。しかし白河帝



講演される坪内顧問



は最も淫らで鳥羽帝の妻である待賢門院に手を付け崇徳帝を産ませたし、鳥羽帝も崇徳帝が自分の子でないことを知っていた。故に鳥羽帝が崇徳帝に冷淡な態度を取ったのは白河帝が人倫を乱したことにあったのだ。神武天皇以来数千年の磐石が、これにより揺らいだのである。後生の人間はこれを戒めとしなければならぬ。

信西は記録所を復活させた。これは後三条帝にならったもので、仁徳帝の宮の修繕を行わなかった儉約、醍醐帝の衣を脱いで民の困窮を思ったところと並ぶ事業であるはずだが、心身の実がなければ形だけの模倣で終わってしまった。後白河帝（及び信西）の政治は作法ばかりで実がない過ちである。今回で保元の乱が終了し、次回から平治の乱に関する記述が始まる。

（小野）

平成三十年一月七日、浦安で崎門研第十二回保建大記の勉強会を開催した。当日は折本代表をはじめ有志三人が参集した。今回から山崎闇斎『日本書記風葉集』九ページから二十四ページを輪読（テキストは『垂加神道（上）』（大日本文庫）を使用）した後、前回に引き続き栗山潜鋒「保建大記」を理解するため、谷泰山の「保建大記打聞」（テキストは杉崎仁編注「保建大記打聞編注」を使用）を読み進めた。今回は、同書百九ページから百十六ページまで輪読した。

今回の主な内容は、以下の通り。



保元三年、後白河天皇は二条天皇に御位を譲った。博識の信西が政治を担い、朝廷の大事を任されていた。藤原信頼が上皇の寵愛により、やや政を預かるようになる、信頼は近衛大将の位を所望し、上皇は許そうとした

が信西は反対した。上皇は承服しなかったが、信西は数々の歴史書を以て上皇を説得しようとした。信頼は不満に思い出仕しなくなった。同じころ信西の姻戚の平清盛が力を伸ばし、源義朝の位を超えた。義朝は面白くなかった。信頼と義朝は結託した。

平治元年、信頼と義朝は蹶起し、上皇のいる参上殿を囲み火を放ち上皇をお移した。潜鋒評するに、男色の害は古くからあるがこれほどひどい例を聞かない。信頼は上皇の寵愛におごり高ぶった人間であり、信西の諫めをもきかなかった。

信西は天文の知識に優れた人間であって、乱がおきたとの知らせを聞くとすぐに天文を見て南に逃げた。逃げきれないと悟ると地中に隠れたが、義朝勢に発見されて斬首された。信西は若き頃死を免れがたいと占われて仏の道に仕えようと出家した人物だと『平治物語』などでは言われる。だがこれは誤りである。そのような人物が政治を左右しようと思うはずがない。信西は藤原頼長に「俺は才能があるのに用いられないから出家する」と語った器の小さい人物である。(小野)

## 時論

### 売国経済論

#### —— 真の独立経済への道

#### アベノミクスの挫折

第二次安倍内閣が発足してから五年が経った。これまで安倍内閣の経済運営が、デフレからの脱却を最優先課題に掲げ、アベノミクスによる三本の矢を放ち、景気浮揚を図って来たのは周知の通りである。三本の矢とは、金融緩和、財政出動、そして成長戦略を指す。その成果はどうであったか。

まず第一の金融緩和に関し、日銀は当初黒田総裁の下で物価上昇率2%、名目GDP成長率3%の目標を掲げ、「異次元の金融緩和」の名の下に、段階的にマネタリーベース(MB)を増やしてきた。マネタリーベースとは社会に出回っている現金と日銀にある金融機関の当座預金の合計額のことである。日銀は12年末に138兆円あったMBを2年後に2倍の270兆円に増やし、さらには二次目標として15年12月までに350兆円まで増やすと宣言し、長期国債や投資信託などの金融商品を大量に買い上げて来た結果、13年3月には135兆円だったのが、14年3月で209兆円、15年3月には296兆円と倍増したが、一方で非金融機関の民間部門が保有する預金や現金の合計額であるマネーストックは13年3月で1150兆円、14年3月で1174兆円、15年3月で1177兆円とほ

んど増えておらず、日銀が放出したマネーは金融機関に滞留し、民間への貸し出しや需要増にはつながっていない。このため17年11月の消費者物価指数は0.9%の上昇に止まり、目標の2%には遠く及んでいない。ここで言う消費者物価指数(コアCPI)は、天候による変動の大きい生鮮食品を除いた指数であるが、さらに原油などエネルギー価格の上昇を除いたコアコアCPIで見ると0.1%の上昇に過ぎず、物価上昇率は限りなくゼロに近いのが現状である。また、日銀の金融緩和によって円安になれば、輸出が増えて雇用も増えるというような、よくある議論も耳にするが、すでに我が国の製造業は生産拠点を海外に移転している上に、円安による原料価格の高騰は生産コストを押し上げ、輸出創出効果を減殺している。事実、アベノミクスが始まってから、為替レートは急激に円安になり、株高によって企業業績も回復したが、米国や中国、EUへの輸出数量は何れもほとんど変化がない。

これらの事実は実体経済に対する金融政策の無力を意味しているのではなく、経済のデフレ局面においては、金融緩和と同時に財政支出を増やして需要を創出し、日銀マネーが市中に浸透する様にしなければならないという事である。そこで第二の矢が重要になるが、安倍内閣では財務省を始めとする財政規律派が、依然としてプライマリー・バランス(基礎的財政収支)の黒字化を強硬に主張

し、安倍首相も彼等の声に引き摺られる形で2020年までのプライマリー・バランスの黒字化を事実上公約し(18年1月、2027年に延期された)、19年10月には消費税の10%への増税が予定されている。しかし、財政規律を理由としたデフレ下での緊縮財政増税政策は、経済の更なるデフレ収縮を引き起こし、日銀による折角の金融緩和による政策効果を台無しにしてしまう。

それに政府は、我が国の財政危機を強調し、消費増税を正当化しておきながら、一方では法人への法定税率を16年の32.1%から17年には29.29%、そして18年には29.74%へと段階的に引き下げる方針を示し、特に大企業には「国際競争力を高める」などと称して「租税特別措置による政策減税」などの優遇特権を与えているため、実効税率は極めて低く、17年3月時点の法定税率25.5%に対して実効税率はその6割にあたる15.6%に過ぎない。さらに、資本金が10億円規模までは、資本金の額に比例して実効税率が上がっていくが、それを超えて資本金の額が増えていく場合には、逆に実効税率は低下し、特に資本金100億円以上の大企業に適用される実効税率13%は、資本金1000万円以下の企業の法人税率(13.6%)と同じになるという、「逆累進」とも言い得る極めて不公平な税制が罷り通っているのである。こうした大企業優遇税制の結果、例えば三井住友FG 0.001%、ソフトバンク0.003%、み

ずばFGO・097%、三菱UFJFGO・306%、ファーストリテイリング6・91%、丸紅7.1%といったように、我が国の最上位に位置し、本来最も法人税を納めるべき大企業がある。最も納めていないというふざけた現状があるのである。中央大学の富岡幸雄教授によると、こうした大企業への不公正な減税相当額はトータルで9兆4065億円になり、この財源を以てすれば10%の消費増税中止はるか、5%までの消費減税が可能であるという。このように、政府は財政危機を煽って消費増税を正当化しているが、その実は、法人減税による税収減のつけを消費者たる一般国民に押し付けているだけだ。ここに於いても大企業・株主重視、中小企業・消費者・労働者軽視のアベノミクスの実態が現れている。

### 新自由主義的構造改革の大罪

アベノミクスにつきまとう緊縮財政論の呪縛が日銀による量的緩和の効果を減殺し、我が国経済のデフレからの脱却を遅らせている元凶である。目下の様に消費と設備投資が収縮しているなかでは、政府が公共投資を拡大して有効需要を創出し、民間の投資を牽引して国民所得を拡大し、消費を拡大することでデフレスパイラルからの脱却を図らねばならない。しかるにアベノミクスにおける第三の矢、すなわち「成長戦略」と称した一連の規制緩和政策は、新自由主義的な構造改革の延長であり、政府による公共投資を構造的に困

難にする結果、国民を貧富の格差で分断し、我が国経済をデフレの奈落に突き落とす愚策である。そしてその規制緩和の背後では、竹中平蔵を始め、規制緩和によって生まれた利権を食い荒らすレント・シーカーが暗躍しているのである。

周知のように、今世紀初頭に発足した小泉内閣は竹中平蔵を司令塔に据えた新自由主義的構造改革を推し進め、郵政民営化を強行した。当時の郵政公社は、郵便局と郵貯・簡保の三位一体で成り立っていたが、小泉・竹中は、郵政公社を民営化して郵貯・簡保の金融2社を分離しこれを売却することを決定したのである。

しかし、それまで郵便局を通じて郵貯と簡保の金融2社で集められた資金は政府に集中され、政府が発行する国債の購入資金と財政投融资の原資として運用されてきた。財政投融资は、民間での投資にそぐわない分野への公共投資と社会的インフラストラクチュア向け投資に向けられて国土建設に使われ、戦後の経済成長を牽引して来た。2000年までは、財政投融资の原資は、郵便貯金と簡保生命に加えて公的年金資金が大蔵省理財局資金運用部に預託され、ここから政府系金融機関や道路公団などの特殊法人への融資と国債・地方債・特殊法人への投融资として活用されていた。こうして国民から集めた資金が地方経済に還流していたのである。しかし2001年以降は、折からの財投改革によつ

て、郵政・年金資金は自主運用に変わり、既に郵政と財投との直接的な資金ルートは絶たれていたにもかかわらず、竹中は郵政資金が無駄な公共事業の原資になっているというデマを喧伝し、いわば大義なき郵政民営化を断行したのである。

また政府の国債発行による資金調達について見ても、当時、日本国債の保有者別内訳は、国債発行額の95%までを国内の投資家が保有しており、極めて安定した調達構造になっていた。とりわけ、郵政公社が全体の三割を保っていた。とりわけ、郵政公社が民営化されれば、この郵貯資金が海外に流出し、日本国債の保有構造が崩れ、長期金利の上昇となって日本経済に大きな打撃を与えることが懸念された。このように、郵政民営化は政府による公共投資の原資を枯渇させ、デフレ脱却の為の機動的財政出動を構造的に困難にする政策なのである。

### アメリカの外圧による構造改革

さらに問題なのは、こうした国民経済の根幹に関わる政策が、アメリカによる構造改革要求という外圧に屈する形で推し進められた事だ。アメリカは、70年代以降の慢性的な財政赤字と貿易赤字によるドルの流出とドル安の進行、対外債務国への転落という現実に直面した。そこで、80年代以降、国内では金融中心の産業構造への転換を図ると共に、対外的には世界的な金融市場の自由化を推し進める

ことで、ドルの「帝国循環」を維持する戦略を打ち出したが、その際最初の標的になったのが、我が国の金融機関に所在する莫大な金融資産、なかでもその最大のシェアを占める郵貯・簡保資金であった。93年に、米国債の安定購入先としてこの郵貯マネーに目を付け、これを具体的に提案した人物がケント・カルダーであり、米国政府は翌94年から「年次改革要望書」を我が国政府に突きつけ、郵政民営化を「要望」するようになったのである。ちなみに、このケント・カルダーは竹中の盟友とされる。

現在我が国の金融機関における資金量は1275兆円であり、このうち14%にあたる178兆円は郵貯銀行に預金され、さらにこのうち107兆円が国債購入に回っている。さらに、簡保生命には85兆円の保険マネーがあり、このうち48兆円が国債の購入に回っている。つまり、郵貯・簡保資金263兆円から155兆円(59%)が国債に投資されているのである。一方で米国の国債保有者内訳を見ると、海外投資家の比率は、25・5%と米国人投資家の23・2%を上回っており、その内我が国が約40%を保有しているが、周知の様に近年では中国が保有比率を増やして対米外交カードにしている。そこで、米国は莫大な金融資産を自主運用することになった郵政の金融2社に日本国債での運用比率を下げさせ、代わりに米国債を買わせる事を目論んだ。2012年、菅義偉官房長官の強行人事で



郵貯銀行社長に就任した長門正貢（現日本郵政社長）は、シティバンク日本法人の会長を務めた外資派とされるが、彼は当時日本郵政の西室泰三の指示で短期間に日本国債の保有を減少する経営方針を打ち出し、実際に、2015年9月時点で国債の比率は45・2%だったのが、わずか二年後の2017年9月には31・1%に急落し、簡保も55・2%から52・1%まで減った一方で株や外債の保有比率が飛躍的に高まっている。ちなみに、上述した菅義偉は、竹中が総務大臣（郵政公社を所管）を務めた時の副大臣、第一次安倍内閣時の総務大臣であり、12年4月の改正郵政民営化法案に際しては、小泉進次郎や中川秀直、平将明等と共に党議拘束に反しまで反対した外資派の一味とされる。その菅の肝いりで郵政公社の社長になった西室泰三もアメリカと太いパイプを持つとされる。要は、小泉・竹中・菅・西室・長門は共謀結託して米国の意に阿り、我が国固有の資産である郵政資金を外資の生殺与奪に委ねようとしているのである。正しく売国奴という他ない。

### 保守の仮面を被った新自由主義者

エコノミストの菊池英博氏は、その著『新自由主義の自滅』のなかで、安倍内閣による新自由主義的な亡国政策として①税法の破壊―法人税減税②労働法の破壊―労働時間管理から経営裁量労働制へ③医療の破壊―混合診療をテコに国民皆保険の崩壊④国家主権の

破壊―「戦略特区」という租界⑤農業の破壊―農協解体と食料自給率低下を挙げている。

①については前述した通りであり、大企業重視、消費者軽視の不正な税制が罷り通っている。②について、安倍内閣は、小泉内閣以降推し進められて来た労働規制緩和を拡大し、これまで最長3年であった派遣期間を廃止し、同一部署での派遣労働を3年と改めることで、実質的な派遣雇用の永久化を可能にする「派遣法改訂」、ホワイトカラーに対する「1日8時間・週40時間の法定労働時間制を廃止し、労働生産性の向上と称して裁量労働制による無償残業を可能とする「残業代ゼロ法案」、これまで原則解雇が不可能であった労使関係を改め、金銭による自由解雇を可能にする「金銭解雇自由法案」等を推し進めている。派遣労働を含む非正規雇用の増加は、安倍内閣に始まったことではないが、少なくとも安倍内閣による一連の労働規制緩和と政策が、こうした傾向に掉さしていることは間違いない。非正規雇用の拡大は実質賃金を押し下げ、経済に対するデフレ圧力となっている。安倍首相は、自らの政権下で有効求人倍率が12年10月の0・83倍から1・56倍（17年5月）となったことを強調しているが、そもそも少子高齢化によつて就労人口が減少しているのであるから、有効求人倍率が上がるのは当然であるし、その内実が労働規制緩和による非正規雇用の拡大によるものであり、そのせいで実質賃金はむしろ低下しているのであれば

本末転倒であり、利益を得るのはパソナのような人材派遣会社だけである。

③について、国民保険適用外の自由診療と保険内診療の併用を認める「混合診療」は、上述した「年次改革要望書」にも記されたアメリカの対日要望事項である。アメリカは保険外診療の拡大によつて、未承認新薬の販売と新たな保険市場の創出を狙っており、その為に我が国の世界に類稀なる国民皆保険制度の形骸化を目論んでいるのである。国民皆保険制度の形骸化は、貧富の間における国民の医療格差を拡大し、一君万民の国体にもとることと言うまでもない。④に関して、国家戦略特区は、昨今の家計学園問題に象徴される様に、規制緩和の弊害を見事に露呈している。そこでは外国資本を含む企業の自由な参入による公正な競争が謳われながら、その裏では安倍首相と気脈を通じた一部のレント・シーカーが不当な政治圧力を加えて国家の行政手続きを歪め、規制緩和によつて生まれた利権を私物化しているのである。その中心にいるのが、国家戦略特区制度を首唱し、現在も政府の諮問会議で民間議員を務める竹中平蔵だ。竹中が農業改革特区で、外国人による農業移民の受け入れを解禁させ、自らが会長を務めるパソナにその斡旋業務を受注させているという、露骨な利益相反の問題については前に触れた通りだ。そして⑤の農協改革について、政府は、表向きの目的を「農家所得の向上」などといったが、その実態は、農

協の100兆円に近い（JAバンク貯金92兆円、JA共済契約保有高300兆円）莫大な金融資産の寡奪を企むグローバル資本が在日米国商工会議所を通じて我が国に市場開放を要求し、政府がこの外圧に屈服した結果に他ならない。2014年5月、在日米国商工会議所は、JAにおける農業事業から農林中金やJA共済連などの金融事業を分離し、他の金融会社と同等の条件で競争させ、さらに准組合員による利用を規制するよう我が国政府に「提言」した。この「提言」ならぬ「要求」を受けて、政府の規制改革会議は、早速同月に「農業改革に関する意見」を公表し、全中の廃止、全農の株式会社化、准組合員の事業利用を正組合員の二分の一に規制といった急進的要求をJAに突き付けたのである。その改革の急先鋒が小泉進次郎であり、彼は父親一郎がアメリカの手先として郵政民営化を強行し、郵政マネーを外資に明け渡したのと同様に、今度は農協を解体して莫大な農協マネーを外資の餌食に供しようとしている。正に売国の遺伝子、竹中と同類の国賊という他なく、こうした連中を政権の内部で重用している安倍首相も売国行為に加担しているのである。

### 亡国のTPP

そして何といつても、安倍内閣による規制緩和政策の最たるものは、やはりTPPだろう。かつて安倍首相は、民主党によるTPP参加を公約違反として批判し、「聖域なき関

税撤廃を前提とするTPPには断固「反対」と言って、農協票を獲得しておきながら、一度政権を奪還するや掌を返した様にTPPを積極的に推進し出し、これに「反対する農協を『我が国農業の競争力を阻害している』など」と言い掛かりをつけて解体してしまった。そもそも我が国は国土面積が狭い上に、農地が国土に占める割合も小さい。農業の平均経営面積はアメリカが日本の75倍、EUが6倍、そしてオーストラリアが1309倍と圧倒的な開きがあり、農産物の関税を撤廃すれば、我が国の農業が壊滅的打撃を被るのは目に見えている。また我が国の農業が政府によって過重に保護されているという見方についても、我が国の農家の所得に占める財政負担の割合は、15・6%と、アメリカの26・4%、フランス90・2%、イギリス95・2%と比較しても格段に低く、平均関税率についても我が国は11・7%、アメリカは5.5%であるが、EUは19・5%と比べ決して高くはない。こうした状況下での関税撤廃は、ただでさへ競争条件が不利で政府の保護も希薄な我が国の農業を壊滅させ、食料自給率の一層の低下を招き、食料安保におけるアメリカへの従属強化を招く事は必定だ。

我々国民は、安倍首相が政権奪還をかけた2012年12月の総選挙を前に、『文藝春秋』で次の様に述べていたことを忘れてはならない。

「日本という国は古来から朝早く起きて、

汗を流して田畑を耕し、水を分かち合いながら、秋になれば天皇家を中心に五穀豊穡を祈ってきた、『瑞穂の国』であります。自助自立を基本とし、不幸にして誰かが病に倒れば、村の皆でこれを助ける。これが日本古来の社会保障であり、日本人のDNAに組み込まれているものです。

私は瑞穂の国には瑞穂の国にふさわしい資本主義があるだろうと思っています。自由な競争と開かれた経済を重視しつつ、しかしウォール街から世界を席巻した、強欲資本を原動力とするような資本主義ではなく、道義を重んじ、真の豊かさを知る、瑞穂の国には瑞穂の国にふさわしい市場主義の形があります。

安倍家のルーツは長門市、かつての油谷町です。そこには、棚田があります。日本海に面していて、水を張っているときは、ひとつひとつの棚田に月が映り、多くの漁り火が映り、それは息を飲むほど美しい。

棚田は労働生産性も低く、経済合理性からすればナンセンスかも知れませんが。しかし、この美しい棚田があつてこそ、私の故郷なのです。そして、その田園風景があつてこそ、麗しい日本ではないかと思えます。市場主義の中で、伝統、文化、地域が重んじられる、瑞穂の国にふさわしい経済のありかたを考えていきたいと思えます。」

今となつては、もはや悪い冗談にしか聞こえないが、安倍首相が推し進めたTPPは瑞

穂の国たる我が国の農業をアメリカの強欲資本主義に売り渡し、故郷の美しい棚田を台無しにする売国政策だ。幸い自国第一主義を掲げるトランプ大統領の誕生によって、TPPは未遂に終わったが、少なくともこの一件によって安倍首相の正体が保守の仮面を被った新自由主義者であることははっきりした。

### 種子法廃止とグローバル資本の脅威

どちらかと言うとTPPによる関税撤廃がもたらすのは、食料自給率の低下という、いわば「量的」危機であるが、17年4月安倍内閣が成立させた種子法廃止法案は、我が国の農産物を遺伝子組換種子で汚染し、「質的」危機をもたらすものだ。通称「モンサント法案」と呼ばれるこの法案の成立によって、これまで都道府県に義務付けられてきた、稲、麦、大豆といった主要作物の種の生産や普及は根拠法を失い、民間企業の参入が加速すると思われる。問題なのは、この民間参入の拡大によって、モンサントなどのグローバル企業が我が国に「高生産性」を売りにした遺伝子組換種子などを持ち込み、食の安全性を脅かすのみならず、種子への「特許権」を通じて、我が国の農業を実質的に支配する可能性があることだ。（『日本のお米が消える』K&Kプレス刊）

どうやら、この国民のほとんど誰も知らない種子法廃止を提言したのは、首相の諮問機関である「規制改革推進会議」及び「未来投資会議」のようであるが、そのメンバーを見

ると、むべなるかな、竹中平蔵を始め、小泉構造改革の残党、グローバル資本の走狗と化した新自由主義者達が名を連ねている。彼らの狙いは、国家の戦略資源である種子、国家独立の根幹である農業をグローバル資本に売り渡すことに他ならない。もともと仮にTPPが締結されていれば、種子法もISD条項によって、モンサントから提訴されていた可能性がある。

以上みた様に、安倍内閣は、経済成長の為の規制緩和と称しながら、その実はアメリカによる自由化要求に屈し、竹中を始めとするレント・シーカーと結託して新自由主義構造改革を強行することによって、我が国の社会経済システムそのものを、アメリカやグローバル資本の利益に従属させようとしている。

### 真の独立経済を取り戻すために

こうしてみると、この五年間におけるアベノミクスの成果は悲惨だ。たしかに、この五年間で日経平均は倍増し（2012年12月26日の10230円から2017年12月26日22892円）、GDPも50兆円増えた（2012年10〜12月期の492兆円から17年7〜9月期549兆円、ただしこのGDP増加に関しては、16年に政府がGDP統計の基準を改定し、従来「経費」とされた研究開発費を「投資」と見なすなどして30兆円近くかさ上げされており、実際の増加率はほぼ横ばいとの指摘がある）が、株価上昇に関し



ては、日銀やGPIFが国内株を大量に買い入れ株価を吊り上げたことによる「官製相場」であるから当然の結果であり、実体経済の好調を反映したものではない。むしろ、前述したように日銀の異次元緩和によってマネタリー・ベースが336兆円増加したのに対してマネー・ストックの増加は165兆円に過ぎず、両者の差額の171兆円は、金融機関からヘッジファンドなどへの融資を通じて、海外の投機筋に流れているという指摘もある。いまや我が国における株式取引の7割が海外投資家による売買となっており（これはフロアの割合であるが、ストックの保有比率は17年6月時点で30・2%）、これと、アベノミクスによる急激な円安によって日本株がドル評価で割安になっていることなどから、外資による日本株の「買い叩き」が進行しているのである。一方で、円安によっても輸出は増えておらず、むしろ原料価格の高騰などによつて消費を圧迫している。こうしてみるアベノミクスによる株高で恩恵を受けるのは、日本企業を買い叩き、莫大なキャピタル・ゲインと配当を手に入れる海外投機家に過ぎない。彼らは短期的な利益を追及するあまりに、「もの言う株主」として、企業の経営陣に高い自己資本利益率（ROE）を要求し、それが企業を自社株買いや、人件費、設備投資、研究開発等の抑制に向かわせる要因になっている。また人件費の抑制は、労働者に長時間労働を強い、設備投資や研究開発費

の抑制は、技術革新を通じた企業の長期的発展を損なう原因となる。事実、我が国の企業が過去最高益を記録し、内部留保を積み増す一方で、労働分配率はむしろ下がっており、実質賃金は5年前（12年12月）よりも0.1%減少（17年10月時点）した。つまり、海外投機筋が企業利益を吸い上げる一方で、人件費を抑制された労働者は、低賃金・長時間労働に苦しむという搾取の構造が成り立っているのである。実質賃金の低迷は家計の消費支出を圧迫し、デフレを長期化させる一因になっていることは言うまでもない。

こうしてみると、我が国の金融政策においてデフレ脱却を妨げる最大の障害は、過度な金融市場の自由化が招いた株主資本主義の蔓延と、短期利益を目的とした投機マネーの跳梁跋扈にあるとも言える。したがって、政府は労働分配率を上げた企業に減税措置を講じるといった形で人件費拡大へのインセンティブを付与すると共に、投機取引への課税であるトービン税を導入するなどして、実体経済の堅実な成長を促進すべきである。

また財政政策においても、19年10月に予定される消費増税や20年を目途としたPBの黒字化目標は、折角の日銀による異次元緩和の効果を減殺し、デフレから脱却を遅らせる要因となるから撤回すべきだ。上述したように、我が国の大企業は「租税特別措置」によって法人税を殆ど減免されて、莫大な利益を株主への配当や内部留保に割り当てている一方

で、財政再建のつけが消費増税に回されているのである。よつて政府はこうした不公正極まりない税制を是正し、大企業への「租税特別措置」を廃止すると共に、19年10月の消費増税を中止し、逆に消費税5%への減税を実施すべきである。また政府は、PB目標を放棄し、デフレ型の縮小均衡ではなく、公共投資の拡大による成長型の財政均衡を目指すべきである。前述したエコノミストの菊池英博氏は、人口減少時代にふさわしい国土刷新計画として「5年間100兆円の政府投資を実行すれば、民間投資を誘発し、その相乗効果で成長力が強まり、税収の増加で政府投資は5年間でほぼ回収できる」と提案している。

またこれも前述した様に、戦後の経済成長を牽引した公共投資の原資は、財投を通じた中央から地方への資金還流や郵政・年金資金による安定的な国債購入によつて成り立っていたが、折からの構造改革は、そうした資金供給ルートを遮断した。その結果、我が国の金融資産の大部分を占める郵政・年金資金は、自主運用とされ、国債での運用比率が下がる代わりに株や外債での運用比率が飛躍的に高まっている。こうした中で、政府は、将来における公共投資の原資を安定的に調達する為

に、日銀が政府による国債発行と同じペースで国債を購入し続けることを確約させるか、郵政グループや年金機構への統制（経営権）を復活して、資金運用の主たる使途を国債の購入に限定する必要がある。

そして最後に、安倍内閣は、一連の規制緩和政策を廃止し、竹中平蔵等、小泉構造改革の残党を政府内から一掃すべきである。繰り返し述べたように、竹中等はアメリカや外資と結託して我が国に規制緩和を強要し、それによつて生まれた利権を私物化している。目下、安倍内閣が推し進める、労働規制緩和、混合医療解禁、国家戦略特区、農協改革は、何れも我が国の共同体的な相互扶助に基づいた社会経済システムを破壊し、これをアメリカやグローバル資本の利益に従属させるものであるから、全面的に廃止すべきだ。なかでも安倍内閣による新自由主義の最たる政策であるTPPがトランプ政権の誕生によつて挫折したことは我が国にとつて天佑神助と言ふべきである。食糧安保は国家独立の根幹であり、我が国がなすべきなのは、ただでさえ希薄な農業への保護を撤廃するのではなく、逆に現在11・7%に過ぎない平均関税をEU並（19・5%）に引き上げ、輸出補助金等の財政補助によつて最低限の食料自給体制を確保すると共に、種子法廃止による食の安全への不安を払拭して、質量の両面における食料安保体制を構築せねばならない。

詰まる所、我が国の経済再生は、旧来の新自由主義と決別し、共同体的な相互扶助に基づく「瑞穂の国の資本主義」を取り戻せるかにかかっているのであつて、それは取りも直さず、我が国が真の経済的独立を獲得できるかという問題に等しいのである。（文・折本）